で，外面には平行タタキメ，内面には青海波文のアテ具痕が認められる。

まとめ

本住居跡は，遺構範囲の北側が調査区域外であるため，部分的な検出となっている。削平で東部を失っている上に，撹乱により遺存状態も悪く，カマドや柱穴の存在を示す資料も見当たらなかった。不明な点は多いが，貼床の状態及び西壁の立ち上がりなどから，竪穴住居跡であると判断した。本住居跡直下にＳＩ30ｂがあり，本住居跡はその壁面をほぼ共有していたことが伺える。床面の広がりにも類似性が見られることから，ＳＩ30ｂの床面を嵩上げして床面を構築したものと推測される。本住居跡の機能時期は，ＳＩ30ｂの機能時期と大差ないものと推測され，ＳＩ30ｂの出土遺物及び本住居跡出土遺物から平安時代後葉と考えられる。　（吉田昌彦）

30ｂ号住居跡　ＳＩ30ｂ

遺　　構（図98，写真56）

本住居跡は，調査区東部の東向き斜面に立地し，Ａ2－Ｅ3・4の2グリッドにまたがって位置する。周辺には，本住居跡を含め5軒の竪穴住居跡と4基の土坑が密集している。本住居跡は前出のＳＩ30ａの貼床直下から検出された。遺存部北東隅の床面上からは，円形の焼土範囲としてＳＩ34の煙出が検出された。本住居跡上面では検出できなかったことから，古い時期に機能し，本住居跡によって破壊されたものと見られる。遺構範囲内にあるＳＩ33及びＳＫ43・44についても同様である。

堆積土は黒褐色を呈し，層全体の厚さは15cmに満たない。西壁付近の堆積土中には壁面の崩落と思われる褐色土の混入が見られ，層中にも褐色土塊を少量含んでいる。人為的な堆積土１層とみられる。本住居跡の遺存状態はあまり良好とは言えず，遺存部自体にも明確な特徴を示す部分がないため，遺構の平面形は確認できなかった。床面は，西側60cmは地山のＬⅥを削り込んだ平坦部であり，東方ではＳＩ33及びＳＫ43・44の堆積土であり，広い範囲で落ち込みが見られる。壁面は西壁が遺存する。床面から緩やかな立ち上がりが確認され，そのままＳＩ30ａ遺存部に移行していたものと見られる。本住居跡からは壁溝及びカマド・柱穴は確認できなかった。

遺　　物（図98，写真102・136）

本住居跡からは，北西隅の床面すぐ上より完形の土師質土器が2点伏せられた状態で重なって出土している。その他，土師器等の小片10点が出土している。土師質土器2点を含む4点を図示した。

図98－１・2は回転糸切り無調整の土師質土器小皿である。いずれも，全体的に歪んでおり，底面には切り離しの際に生じた高まりや段差が残存している。同図3はロクロ整形の土師器杯の底部付近資料である。体部下端から底面全面にかけて回転ヘラケズリされており，内面はヘラミガキ後，黒色処理されている。同図4は土師質土器杯の底部付近資料である。体部調整はみられず，内面の黒色処理も行われていない。

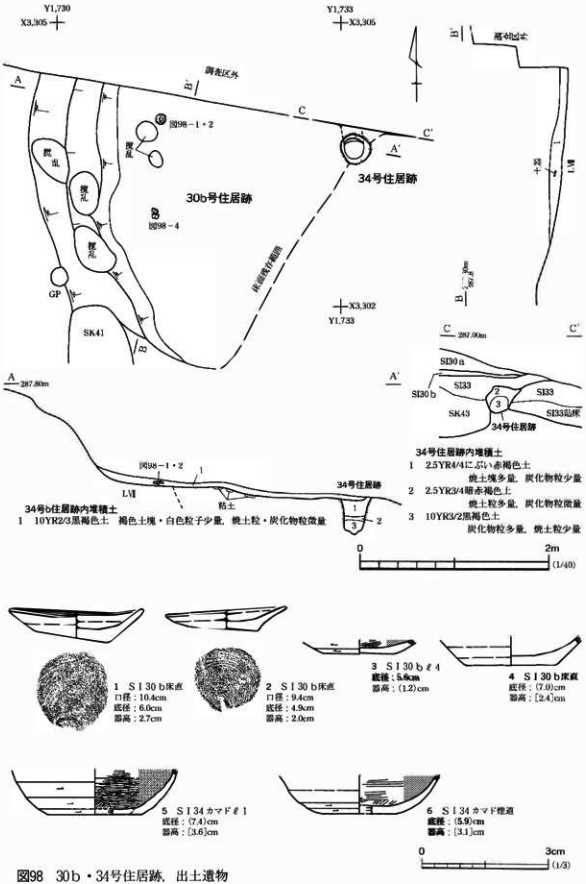


図98　30b・34号住居跡，出土遺物

ま と め

本住居跡は，ＳＩ30ａ同様不明な点が多いが，遺存範囲の類似や壁面の共有状況・堆積土の状態等から，本住居跡の床面を嵩上げしてＳＩ30ａを構築していたものと思われる。また，本住居跡の廃絶に際し，２点の土師質土器を伏せて埋納したものと推測される。本住居跡の所属時期は，出土遺物から平安時代後葉と考えている。　（吉田昌彦）

31号住居跡　ＳＩ31

遺　　構（図99～101，写真57・58）

本住居跡はＡ１－Ｇ10・Ｈ10，Ａ２－Ｇ１・Ｈ１グリッドに所在する，調査区西部の小支谷の南側肩部に作られた古墳時代の住居跡である。東に20mの斜面上方にはＳＩ22が存在する。検出面は谷の肩部ではＬⅤ，谷部ではＬⅤ上面で，露出した貼床を伴う暗褐色土の広がりを本住居跡として捉えた。住居跡東部は調査区外へと延びている。住居跡西部はＳＩ37と重複し，且つ斜面下位のため流れている。重複するＳＩ37との新旧関係は，本住居跡の貼床を切ってＳＩ37が掘り込まれていることから本住居跡の方が古いことがわかる。

平面形は方形を基調とする。ただ，北壁東部に関しては若干膨らみ気味である。規模は北壁と南壁の距離が6.3～6.7mであるので，一辺の長さもその前後だと推測される。掘り込み面はＬⅣ中であり，斜面上位ではＬⅥまで，下位および谷部ではＬⅤ中まで掘り込まれている。ＬⅤが露出してしまう部分にはＬⅥを主体とする土を用いて貼床している。

堆積土は９層に分層される。その内，ℓ９は貼床土である。ℓ５・７は壁の崩落土を含み，三角堆積を呈する。ℓ６は住居南半の床面付近に堆積する。特徴はℓ３に近いが，炭化材・炭化物を含んで，より黒色が強い。ℓ４は周壁にＬⅥが露出していないにもかかわらず，ＬⅥを多量含んでいることから人為堆積とも考えられるが，付近の遺物出土状況とあわせて棚状施設の崩落の可能性も考慮しておきたい。基本的には住居跡の大半を埋めているℓ３の堆積が北西に行くほど薄くなり，そのくぼみを埋めるようにℓ２が堆積している状況から，谷の斜面上方である南東方向からの流入土によって自然に埋没したものと考えている。

カマドが北壁ほぼ中央から検出されている。焚口付近の東半分は工事用の丁張があったため調査できなかった。煙道は失われており，燃焼部のみ確認できた。遺存状況については，左袖はしっかりと残っていたが，右袖は粘土が流れたような痕跡のみが認められた。また，堆積土中に焼けた天井部の崩落土が存在していないことから，住居廃絶時にカマドを破壊し，構築土の大半を住居外に持ち去ったものと思われる。燃焼部の奥行きは1.3m，幅は45cmを測る。燃焼部の構築は特定の掘形を設けず，貼床の上に褐灰色粘土を混入させたＬⅣを帯状に盛ることにより形作られている。さらに，袖の先端には石を立て，この上に石を渡すことにより，焚口としていたのであろう。その焚口付近には石が２個，焚口を塞ぐように検出されている。そのいずれかが，焚口の天井石と考えられる。焚口から約40cm内側の，若干右袖寄りに石製支脚が立てられていた。支脚は燃焼部底面から

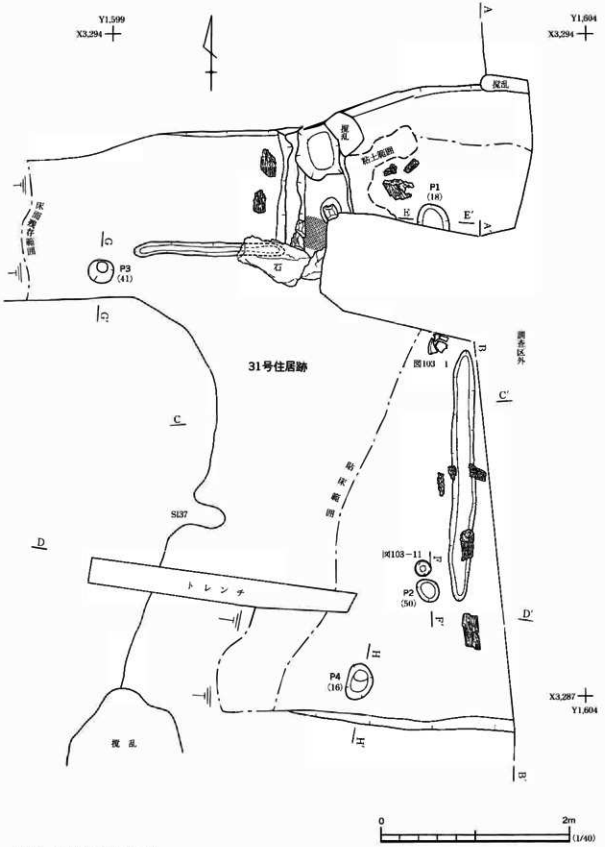

Y1,599
X3,294
Y1,604
X3,294
A
A'
攪乱
攪乱
粘土範囲
P1
(18)
E
E'
床面検出範囲
G
G'
P3
(41)
31号住居跡
図103 1
B
B'
調査区外
C
C'
SI37
粘土範囲
D
D'
図103－11
P2
(50)
トレンチ
F
F'
H
H'
P4
(16)
X3,287
Y1,604
攪乱
0
2m
(1/40)

図99　31号住居跡（1）

24cmの高さを測る。燃焼部奥壁際はピット状に一段掘りくぼめられる。住居壁の内部に掘られているため煙出しとは考えられず，正確な機能は不明であるが，煙道から流入する水の進入防止策の可能性も考えておきたい。

ピットは４個検出されている。Ｐ２・３は位置および規模から考えて，主柱穴と判断した。径は30cm程度と住居跡の規模に比べると小さいが，深さが40～50cmを測るなど深く掘り込まれている。Ｐ１は位置からすると主柱穴の可能性もあるが，Ｐ２・３よりも平面形が大きくやや浅めであるため，別の性格があったものと考えたい。

また，Ｐ２・３以外の主柱穴は，調査区外の丁張下およびＳＩ37に切られた部分にあったものと想定される。カマドに対面する南壁際に位置するＰ４は支柱穴もしくは入り口施設の痕跡かと考えている。

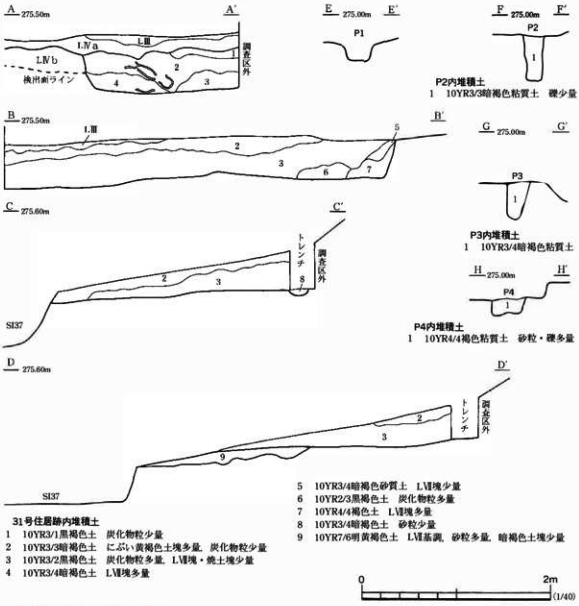


図100　31号住居跡（２）

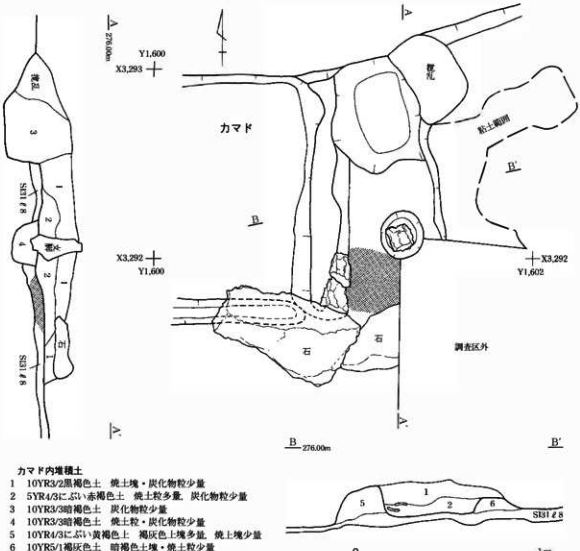


図101　31号住居跡（3）

その他，付帯施設として溝が2条検出されている。カマド焚口左方の溝は東西方向に伸びており，1.6mの長さにわたる。住居跡中央東寄りの溝は南北方向に伸び，長さ2.7mを測る。いずれも住居外に出ておらず排水溝とは考えにくく，間仕切り溝の一種かと思われる。

カマド周囲と南北溝周囲の床面からは炭化材が検出されている。分析の結果，これらの樹種はクリとケヤキであり，建築部材の一部かと考えている。

遺　物（図102～105，写真102～105）

本住居跡からは略完形個体24点を含む土師器232点，須恵器1点，手捏ね土器1点が出土した。略完形個体の内，22点はカマド右脇から折り重なって出土している。下位の土器には杯が多く，大半が正位で床面に置かれ，入れ子状に重ねられていたものもある。上位にある土器は甕・甑で占められ，斜位または横位に倒れたような形で下位土器の上に乗っていることから，遺構として検出されてはいないものの，棚状施設からの落下が想像される。

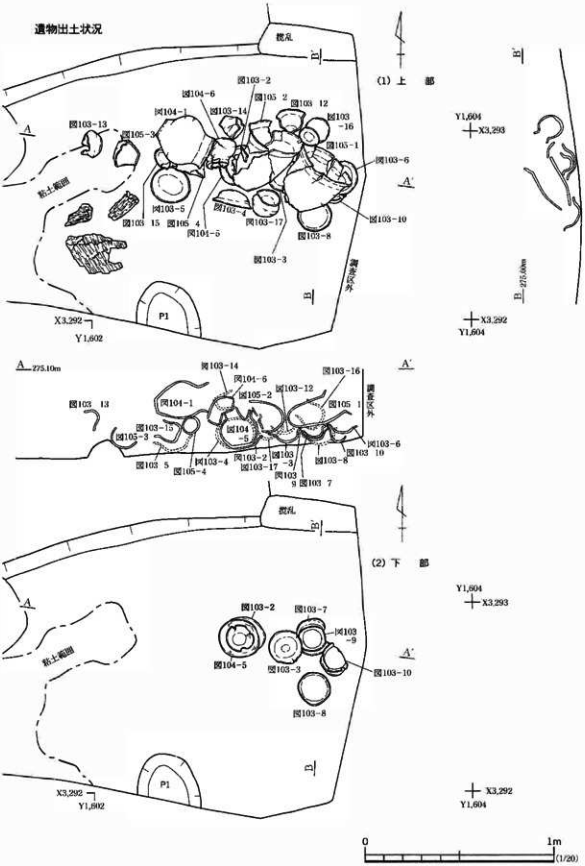


図102　31号住居跡（４）

また，杯類は床面に直置きされたものほど被熱して，焼けはじけている率が高く，入れ子の内部のものはさほどでもない。さらに，上位出土の甕・甑の類に関して，焼けはじけはほとんど見受けられない。このことから，本住居跡は廃絶時に床面付近でくすぶるように火が焚かれた焼失住居であった可能性が指摘できる。

図103には杯・鉢・小型甕を図示した。1～11は杯である。いずれも丸底で，口縁部が外反する器形を持つ。1・11を除いてはカマド右脇から出土している。1・5は深く，大きい体部に，弱く外反する短い口縁がつく。2～4は体部が浅く，口縁の開きが大きい。口縁部には縦方向の暗文状のミガキが施されている。6～8・11は深い椀形を呈する体部に幅狭い口縁部がつく。口縁の外反の度合いは小さい。6・7は体部浅め，8・11は深めである。9は体部中位に膨らみを持ち，口縁部は強く外反する。10は球状の体部から強く括れて，外反する薄い口縁部へとつながる。体部外面のミガキは幅広で，明瞭に面を形成しており，外見上はヘラケズリに見える。頸部の粘土積み上げ痕が明瞭に確認できる。また，1・2・4・7・8・10・11は床に直置きされていたもので，焼けはじけが顕著である。

同図12～15は鉢である。12・13は球形の体部を持ち，口縁部が大きく外傾する。鉢形の杯とでも言うような器形を呈する。14は平底で，体部の膨らみは小さく，口縁部が弱く外反する。15は丸底で，口縁部は若干外反する。16・17は小型甕である。16は球胴を目指したのであろうが，ひしゃげて円筒形に近づいている。17は胴部が球形を呈し，口縁部の外反の度合いは小さい。頸部には粘土積み上げ痕が明瞭に残される。

図104には甕を図示した。1・5・6はカマド右脇から出土したものである。1は倒卵形の胴部をもつ甕で，頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部は外反する。体部調整として，ナデ後ケズリが施されている。5・6は胴部の丈が短く，球状を呈し，頸部で「く」字状に屈曲して，外反する口縁部に至る器形である。2～4はカマドから出土している。2・3にはハケメが認められる。胴部の形状は球形で，頸部の屈曲の度合いが強い。4は胴部の張りが弱く，最大径は口縁部にある。7は丸底気味の底部を持ち，胴部は球状を呈する。

図105には甑・その他の遺物を図示した。1～4は甑で，カマド右脇から出土したものである。1・2は甕形を呈し，いずれもヘラナデ調整される。胴部の張りは少なく，頸部で「く」字状に屈曲して口縁部は外傾する。径は口縁部が最大となる。3・4は鉢形を呈し，底部に単孔を持つ。ヘラナデにより調整され，体部下端のみヘラケズリが加えられる。5は須恵器甕の破片で，ＳＩ22出土破片と接合している。ＳＩ22の方が斜面上位にあることから，元は其方に伴う遺物かと思われる。外面のタタキメは横位に区画され，内面は同心円状のタタキメが磨り消されているのが観察される。6はカマドの左袖に寄りかかって出土した手捏ね土器である。

まとめ

本住居跡は谷部に作られた方形，北カマドの住居跡である。竪穴壁・堆積土中に酸化の痕跡は認められないものの，床面の炭化材の存在や出土土器が被熱していることから住居を焼いた可能性が

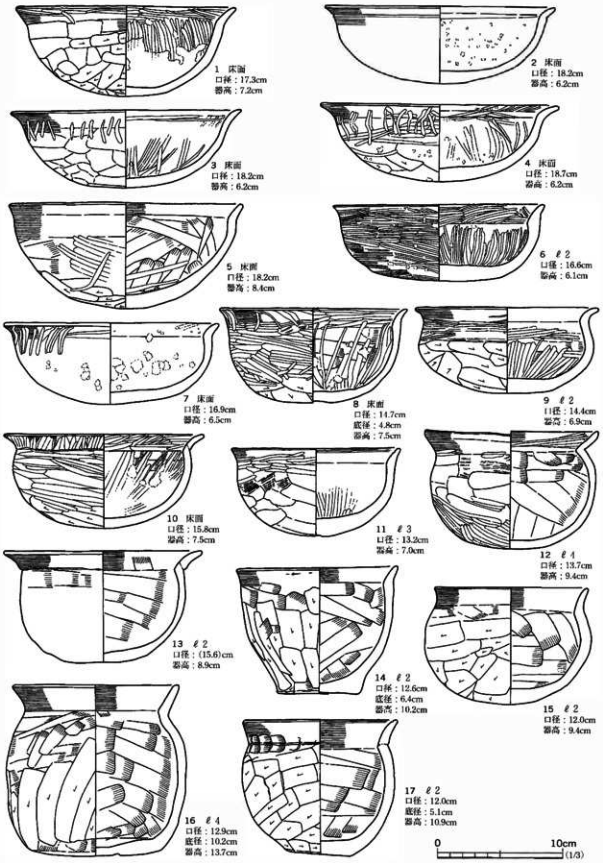


図103　31号住居跡出土遺物（1）

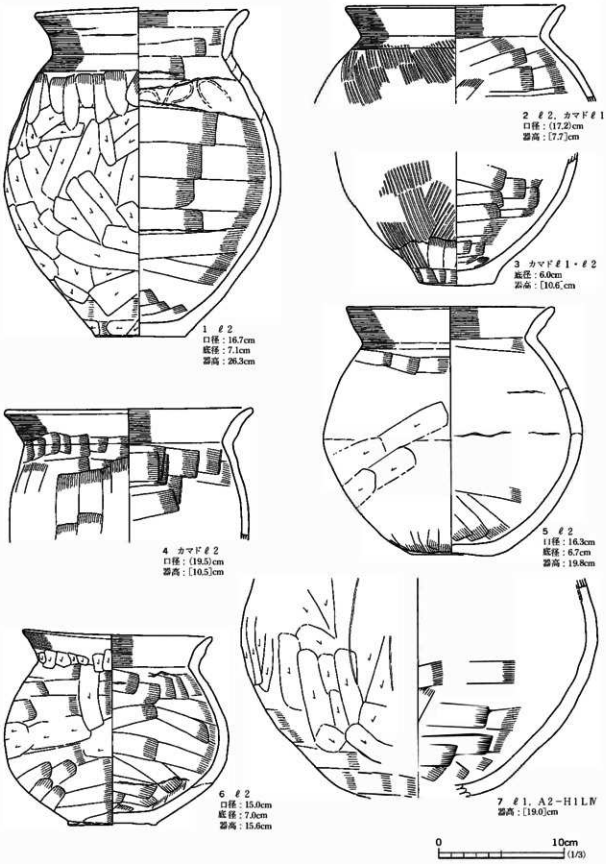


図104　31号住居跡出土遺物（2）

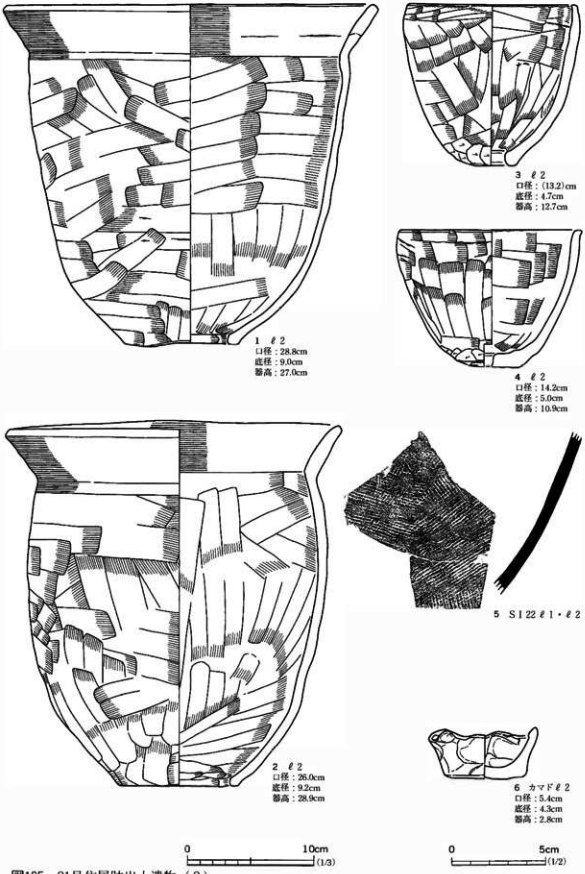


図105　31号住居跡出土遺物（3）

うかがえる。しかも，部材の一部のみ炭化して遺存していることや，土器の被熱の状況から，非常に弱い火熱を受けたのみと推測され，いわゆる火災などではなく，解体後に廃材などに火をかけた程度と考えられる。また，カマドからは手捏ね土器が出土し，焚口が天井石を用いて閉塞したような状況を呈していることから，廃絶に伴う祭祀儀礼が行われた可能性も指摘できる。機能時期は出土土器の年代観から古墳時代の5世紀末葉に位置づけられよう。　　（山　元）

32a・b号住居跡　ＳＩ32a・b

遺　　構（図106，写真59）

本住居跡は，調査区中央部のＡ３－Ｄ・Ｅ２グリッドに位置する。周辺は，東西を谷に面した度せ尾根状をなし，遺構は東に向いた谷頭に立地している。この地点には住居跡６軒（ＳＩ29a・29ｂ・32a・32ｂ・35・36）が重複し，本住居跡はＳＩ35・36より新しく，ＳＩ29a・ｂより古い。調査の結果，本住居跡は新旧２時期にわたることが判明した。しかし，付属施設が不明確であるなど，個別に述べるには貧弱な所見しか得られなかったため，ここでは一括して述べることとする。

遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれも人為堆積と考えられる。１・４が貼床構築土で，その上面が新段階の床面である。４は旧期の壁溝を埋め戻している。

本住居跡は，西端部分が検出されたのみで，その構造など不明な点が多い。また，床面がＳＩ29に壊されるなど，遺存状態も良いとはいえない。検出された部分から推定すれば，平面形は隅丸方形を呈するようである。古期の住居跡は若干丸みをもち，新期に北西に広げる形で拡張している。規模は南北で，ＳＩ32aが8.25m，ＳＩ32ｂが7.90mを測り，東西はおおむね2.1m程度が検出されている。床面は，ＳＩ32aがおおむね10cmほど高く，いずれも東に緩やかに傾斜する。

床面からは，ピット５個と壁溝１条が検出されている。５個あるピットの内，Ｐ１・３・４は相対的に深いことから，主柱穴と考えられる一群である。Ｐ１は平面形が二重になっている部分があり，新期に東側とＰ４，古期に西側とＰ３とが組んで機能したとみられる。Ｐ３からは柱痕が確認されているが，混入物から考えて，柱は抜き取られたと判断される。

壁溝は，検出層位やＳＩ32aの周壁のやや内側に巡る点から，明らかにＳＩ32ｂに伴うことが分かる。溝自体は，人為的に埋め戻されている。

遺　　物（図106，写真105）

遺物は土師器・須恵器・石製品が出土した。ＳＩ32aに伴うのは土師器片172点，須恵器片７点，ＳＩ32ｂのそれは土師器片38点を数える。遺物はともに図106に示した。１は壁溝から出土した，ＳＩ32ｂに属する土師器杯である。底部から外反し，体部中位で張り出して，口縁部が直立気味に立ち上がる器形を呈する。口径に対して器高が低い特徴をもつ。二次焼成を受けているらしく，体部外面は赤く変色している。器面の磨滅も著しく，体部調整の観察も困難だが，手持ちヘラケズリが施されたと判断した。２はＳＩ32aから出土した土師器杯で，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整される。回転ヘラケズリは比較的古い様相ではあるが，１の器形を勘案すれ

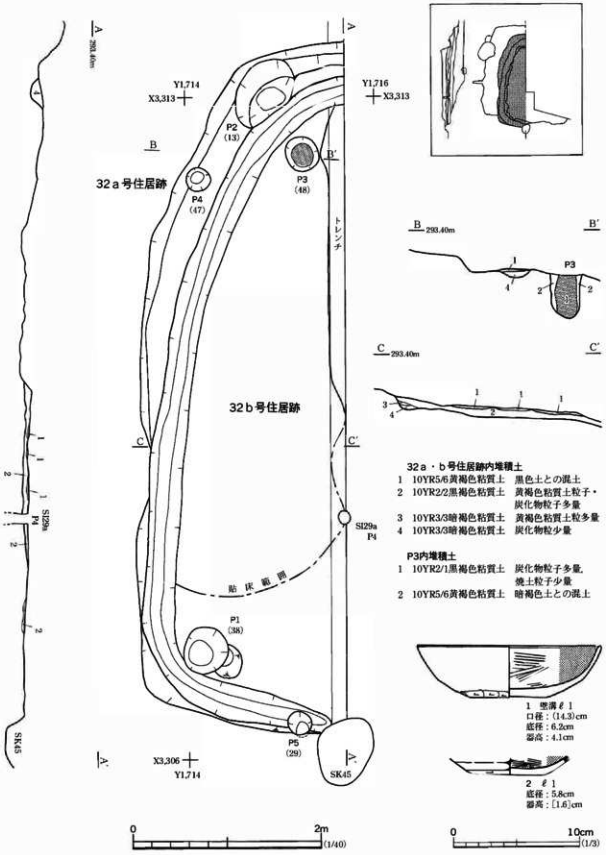


図106　32a・b号住居跡，出土遺物

ば，これらの土器は，9世紀末葉に位置づけられる。図示しなかった土師器杯も同様の特徴である。

まとめ

本住居跡は，住居跡集中区から検出された。貼床とみられる土層も存在し，周壁と壁溝が西壁中央付近で交差しているので，棚状施設ではなく，作り替えをもつ2軒の住居跡と判明した。出土土器は，ＳＩ36より新しくＳＩ29出土土器より古い様相を持っている。これは重複関係とも矛盾しない。したがって，本住居跡が機能したのは，平安時代前葉に比定できる。　（佐藤）

33号住居跡　ＳＩ33

遺　構（図107，写真60）

本住居跡は，調査区東部のＡ２－Ｅ４グリッドに位置し，約15°の東向き斜面に立地する。検出面は，西部でＳＩ30b床面，東部でＳＩ38堆積土上面及びＬＶ上面である。本住居跡は，多数の遺構と切り合い関係にある。ＳＫ43・44及びＳＩ30ａ・ｂ，ＳＩ34・38と重複しており，ＳＩ38より新しく，他遺構よりは古い。また，南西１ｍにはＳＫ39・41が存在している。

堆積土は５層に分層した。ℓ１が住居跡内堆積土である。ℓ２～５は掘形理土で，ℓ２・３上面が床面である。中でもℓ３～５はＬⅦを多量に含む。

本住居跡は，北側が調査区域外に延び，東側は流出しているなど，正確な規模や全体の形状は把握できなかった。遺存部から推定すれば，方形を基調とするようである。規模は東西で4.7ｍを測り，南北では２ｍを検出している。西側では，ＳＫ43・44，ＳＩ34の各遺構及び屋外ピットが床面を掘り込んでいるため，遺存状態があまり良くない。遺存部の中央から東側にかけては，床面はほぼ平坦に整えられているが，東方に若干傾斜している。

西壁は，床面からほぼ垂直に切り立っている。上部をＳＩ30bに切られているものの，壁高は最大26cmを測る。北方隅には，調査区域外へ若干丸みをもって延びている。一方，南壁では西半をＳＫ44及び屋外ピットによって失っているが，東部は遺存しており，壁高は最大19cmを測る。壁溝及びカマドは，調査範囲内においては確認できなかったが，西壁にみられた丸み部分がカマド袖の可能性がある。

ピットは３個検出した。その位置と規模から，Ｐ２・３が主柱穴で，Ｐ１は補助的な柱穴と見られる。Ｐ１は，Ｐ２－３の中央付近に位置する。平面形は長軸60cm，短軸35cmの楕円形を呈し，柱痕の直径は20cm，深さは29cmを測る。柱間はＰ１－２で95cm，Ｐ１－３が1.25ｍを測る。堆積土は柱痕のℓ１と浅い掘形埋土ℓ２の２層とした。床面上には柱痕を取り巻く掘形が確認されていないことから，浅いくぼみ状のℓ２に柱を据えた状態でそのまま貼床が施されたものと考えられる。

Ｐ２・３は上面が楕円形を呈するピット群である。大きさは，Ｐ２が長径32cm，深さ23cmを測り，Ｐ３が長径30cm，深さ48cmを測る。両柱穴の柱間は2.15ｍを測る。堆積土はいずれも黒褐色土の単一層で，掘形は確認されなかった。Ｐ１同様，柱を据えた状態で貼床が施されたのではないかとみている。

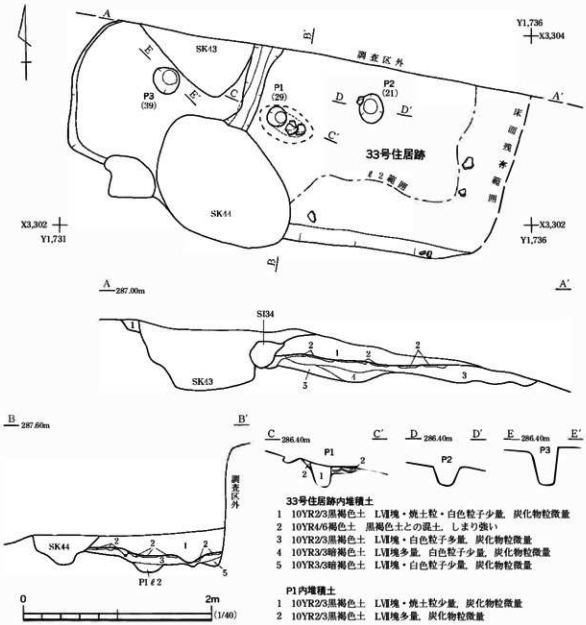


図107　33号住居跡

遺　　物（図108，写真15・16）

本住居跡からは，堆積土を中心に土師器片410点，須恵器片２点，石器２点が出土している。Ｐ１のℓ２下部から土師器杯２点が正位の状態で出土した。２点の内，上位の資料にＳＩ38ℓ１・５から出土した土師器小片３点が接合した。この内，６点を図示した。

図108－１～４はロクロ整形の土師器杯で，いずれも内面はヘラミガキ後，黒色処理されている。外面は，１・３では体部下端から底面全面にかけて回転ヘラケズリ，２では体部下半が手持ちヘラケズリであり，４は回転糸切り無調整である。同図５・６はロクロ整形の土師器甕の底部付近資料で，体部下端はヘラケズリされ，底面切り離しは静止糸切りである。

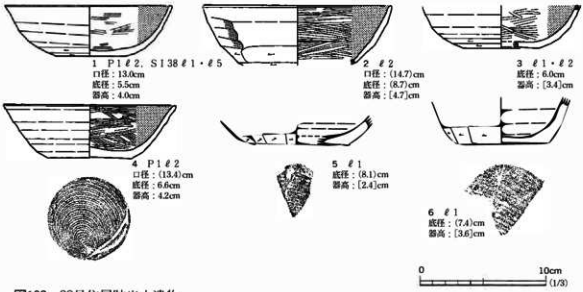


図108　33号住居跡出土遺物

ま と め

本住居跡は東向き斜面に存在し，一般に居住には適さないと考えられるが，周辺一帯は斜面上に多数の竪穴住居跡が存在し，遺構の集中域を形成している。全体像は確認できないが，遺存部の形状から方形を基調とする竪穴住居跡とみられる。カマドの存在は不明だが，西壁北側に確認できる不自然な褶曲がカマド左袖への導入部と見ることもできる。本住居跡の所属時期は，出土遺物から平安時代前葉である。

（吉田昌彦）

34号住居跡　ＳＩ34

遺　　構（図98，写真60）

本住居跡は，調査区東部の東向き斜面に存在し，Ａ２－Ｅ４グリッドに位置する。ＳＩ30ｂを精査中に，北端の床面上でドーナツ状の焼土範囲を検出した。当初はＳＩ30ｂに伴う鍛冶炉と考えていたが，調査の結果，カマド煙道及び煙出であると判明した。従って，この煙道及び煙出を別の竪穴住居跡に伴うものと考え，ＳＩ34と命名した。

本住居跡は，ＳＩ30ａ・ｂと重複し，これらの堆積土中では確認できなかったことから，これら２軒の住居跡より古いとみられる。一方，本住居跡の煙道がＳＩ33，ＳＫ43の堆積土を掘り込んでいることが確認されており，これらの遺構より新しい。さらに，南方にはＳＫ44が隣接するが，直接の重複はない。

煙道内の堆積土は３層に分層した。ℓ１はにぶい赤褐色を呈し，焼土粒を多量に含む。ℓ２は暗赤褐色の薄い平らな層で，この層もかなりの焼土を含有する。ℓ１・２に含まれる焼土は粒子が小さく，煙道壁面の崩落と考えられるため，ともに自然堆積とみられる。ℓ３はＬⅢに対応すると思われる黒褐色土を主体とし，炭化物を多量に含み，焼土は少量である。ℓ３は煙道の中にも含まれていることから，これも自然堆積とみられる。

煙出は円形を呈し，直径は30cmを測る。煙出の周壁は1～2cmの厚さで赤褐色に変色し，硬化もみられる。煙出は検出面から深さ35cmの地点で煙道と連結し，さらに，煙道はわずか15cm北方で調査区外へと延びていく。

遺　　物（図98，写真105）

本住居跡では，土師器片14点が出土している。これらの遺物は，本住居跡の埋没に伴い周辺遺構から流入したものと考えられる。その内，土師器杯の小片2点を図示した。

図98－5・6はロクロ整形の土師器杯で，内面はヘラミガキ後，黒色処理されている。外面は，5では体部下半から底面にかけて手持ちヘラケズリされ，6では体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリされている。なお，5の底面には回転糸切り痕が認められる。

ま と め

本住居跡は，カマド煙道部のみが検出された竪穴住居跡で，詳細に関しては不明である。遺物は，煙道内堆積土中から破片の状態で出土しているため，本住居跡に伴うものとは言い切れない。他遺構との重複状況から推測して，平安時代に属するのは間違いない。（吉田昌彦）

35号住居跡　ＳＩ35

遺　　構（図109，写真61・62）

本住居跡は，調査区中央部のＡ3－Ｄ・Ｅグリッドに位置する。ＳＩ32の精査終了後，掘り込みを開始したところ，西辺中央の深さ約20cmのところで，地山を掘り残した平坦面が現れた。そこで，この付近の高さで床面らしい土層に注目していたところ，比較的綿まりの強い明るい色調の土層を検出できた。よって，これを貼床と判断し，住居跡と認定した。本住居跡は重複する住居群（ＳＩ29・32・35・36）の中で，ＳＩ36より新しく，ＳＩ29・32より古い住居跡である。

遺構内堆積土は3層に分けられた。その内，上位2層については，ℓ1ａ・ｂと細分した。いずれも人為堆積を示している。ℓ1は混入物の違いで細分され，ℓ1ａが遺構北部，ℓ1ｂが南部にそれぞれ堆積している。断面図では，層理面が明瞭にみえるが，実際は漸移的に推移している。ℓ2はブロック状に堆積する土層で，遺構のほぼ全面にまばらに分布している。その上面はしまりが強く，貼床構築土と判断された。

本住居跡は，西辺近辺が検出されたのみで，大部分は調査区外に延びている。したがって，その構造など不明な点が多いが，検出範囲からある程度推測することは可能である。平面形は隅丸方形を呈し，規模は西辺で5.75mを測る。東西は3.4mまで確認できた。本住居跡上面に構築されたＳＩ32ｂより，一回り小さい形状を呈することになる。床面はおおむねＳＩ36の堆積土を利用し，部分的にℓ2を貼床としている。また，西辺中央部でのみⅦをそのまま整えている。周壁は比較的急峻に立ち上がり，おおむね20cmが遺存している。

床面からは，鍛冶炉1基が検出された。鍛冶炉は西辺・南辺からそれぞれ2.1m離れて存在し，遺構の南西部に位置すると推定される。当初は，重複するどの住居跡に伴うか不明であったが，検

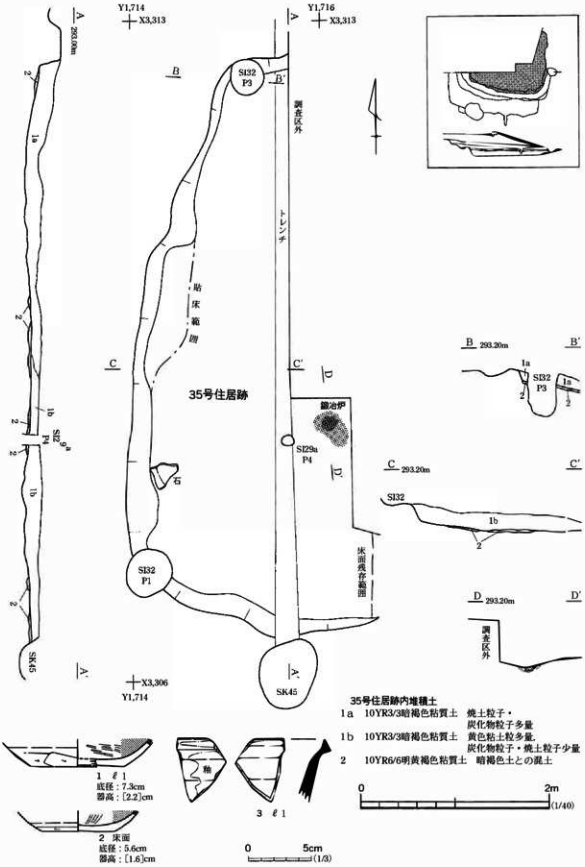


図109　35号住居跡，出土遺物

出レベルを対比した結果，本住居跡に属すると判断された。酸化面の広がりは径40cmを測り，特に15cmの範囲が還元化し，硬く締まっている。厚さは5cmを測り，使用頻度が高いことがうかがえる。

遺　　物（図109）

本住居跡からは，土師器片215点，須恵器片6点が出土した。遺物の内，214点は∥1からの出土であり，直接遺構に伴う資料ではない。その内，遺存度が高く，時期が推定可能なものを図示した。図109－1・2は土師器杯で，体部下端のみ遺存している。いずれも内面は黒色処理している。体部調整に注目すれば，1は手持ちヘラケズリ，2は回転ヘラケズリである。正確な年代は不明だが，1は9世紀後半の範疇に含まれよう。同図3は須恵器長頸瓶の口縁部で，広範囲に自然釉が付着している。

ま と め

本住居跡は，全体像をうかがうことの困難な住居跡である。特筆される事項として，鍛冶炉が設置されている点が挙げられる。重複する住居跡群では，ＳＩ29ａで同様の施設が検出されている。住居が構築され続ける理由は，こうした特定機能の継続性によって説明される可能性もある。また調査区中央部では，ＳＫ29・37など該期の木炭焼成土坑も検出されているので，それらとの関連性を考えることも不可能ではない。所属年代は，出土土器から平安時代前葉である。　　（佐　藤）

36号住居跡　ＳＩ36

遺　　構（図110，写真61・62）

本住居跡は，調査区中央部のＡ３－Ｄ・Ｅ２グリッドに位置する。痩せ尾根状地形の，東側斜面に面する谷頭付近に立地し，この地区には重複する住居跡の他，土坑・溝跡などが遺構集中域をなしている。本住居跡は，6軒の重複する住居跡（ＳＩ29ａ・ｂ，ＳＩ32ａ・ｂ，ＳＩ35・36）の中で，最下位に存在する。つまり，最も古い住居跡である。

遺構内堆積土は，おおむね7層に細分された。いずれも混入物が多い土質なので，これらの多くは人為堆積土と考えられる。ただし，北壁際に堆積する∥2・3については，住居機能中あるいは廃絶直後の流入土と考えることもできる。また，∥6・7は床面を掘り込んだピット内および主柱穴周辺に堆積している。上面が硬く締まっているので，この面が貼床とみられる。したがって，以上の層は貼床構築土と判断された。

本住居跡は，西部と南部の一部が検出されたにすぎず，大部分は調査区外に延びている。検出範囲から推定すれば，平面形は隅丸方形を呈するようで，規模は西辺で5.4mを測る。南辺は4.4mまで残存していた。西辺で比較すれば，本住居跡は重複する住居跡群の中で最も小さいことになる。床面は，大部分がⅦを掘り込んだ面をそのまま用いている。ただ，それほど厳密にはⅦを整えようとはしておらず，床面には若干の凹凸がみられる。これを補正するように貼床が施されている。周壁は0～53cmが遺存し，特に斜面上位の西側の状況が良い。本住居跡上部に複数の住居跡が構築されている点を勘案すれば，周壁がさらに高かったと推定するのは容易である。

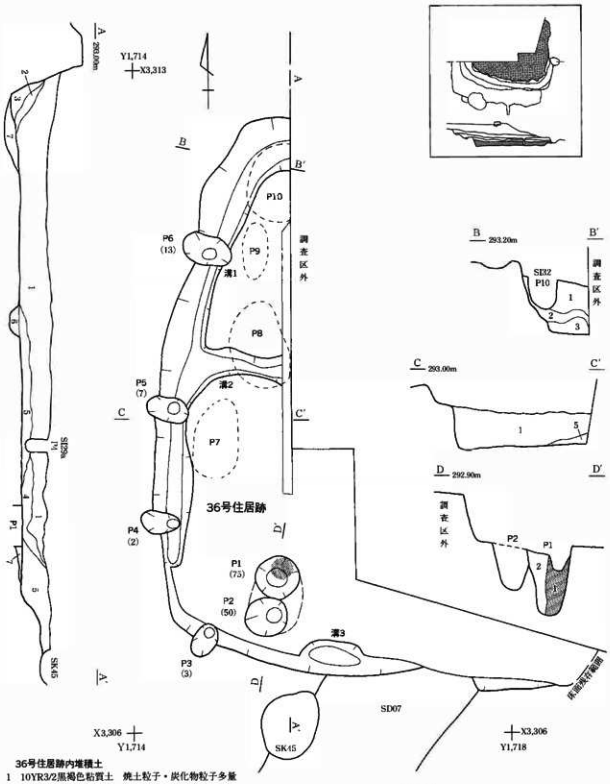

36号住居跡
P1 (73)
P2 (50)
P3 (3)
P4 (2)
P5 (7)
P6 (13)
P7
P8
P9
P10
溝1
溝2
溝3
SK45
SK65
SD07
SD02
調査区外
Y1,714
X3,313
X3,306
Y1,714
X3,306
Y1,718
293.00m
293.20m
293.00m
292.90m
36号住居跡内堆積土
1　10YR3/2黒褐色粘質土　焼土粒子・炭化物粒子多量
2　10YR3/2黒褐色粘質土　黄色土塊・炭化物粒子多量
3　10YR2/2黒褐色粘質土　黄色土粒・炭化物粒子多量
4　10YR5/4にぶい黄褐色砂質土　暗褐色土との混土
5　10YR3/3暗褐色粘質土　炭化物粒子少量
6　10YR3/2黒褐色粘土　炭化物粒子少量
7　10YR3/2黒褐色粘質土　黄褐色土塊多量
P1内堆積土
1　10YR4/2灰黄褐色砂　雲母多量
2　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土　暗褐色土との混土
0
2m
(1/40)

図110　36号住居跡

床面からは柱穴・壁溝・間仕切り溝が検出されている。柱穴は6基あり，周壁から離れた位置にある主柱穴のP1・2と，周壁に沿って並ぶ壁柱穴のP3～6とに分けられる。主柱穴は，径が40～45cm前後，床面からの深さが50～75cmあり，P3～6と比較すれば大型である。P1・2は重複していることから，住居の建て替えを考えることもできる。また，貼床を除去した時点で，P1の柱痕部分が一部空洞化していたので，住居廃絶時に柱材がある程度残存し，遺構の埋没後腐食したと推定することができる。壁柱穴は4基あり，いずれも壁際に掘形をもちながら立ち上がる。遺構床面からの深さは極めて浅く，壁体の保持施設とは考えにくい。やはり，上屋の支保施設と考えるのが妥当であろう。

溝跡は，北辺から西辺にかけて走る溝とそれに直交する溝，南辺の一部に存在する溝の3条ある。これを溝1～3と呼称する。溝1は下端で幅7～25cm，床面からの深さ14cmを測る。この溝1から派生して，東に走る間仕切り溝が存在する。これを溝2とする。溝2は床下ピットであるP8を壊して構築されている。このような間仕切り溝は，SI29aからも検出されており，方向や派生地点など共通性が認められる。溝3は，南辺の一部に構築された，約70cmの小規模なピット状施設である。位置関係から，出入口施設に関連させることも可能であるが，それを支持する所見はない。

また，貼床を除去したところ，床下ピット4個が確認された。いずれも西壁沿いで，規模も小さく浅いものばかりであった。この内，P8の埋土中より土師器杯が良好な状態で出土した。

遺　　物（図111，写真106・113）

本住居跡からは，土師器片165点，須恵器片4点，石器1点が出土した。層位的には#1出土のものが75%を占め，堆積土下層や床面あるいは床下ピットからも出土している。また，本住居跡は，埋め戻されているので，多くはあまり時間差を置かず廃棄されたものと判断される。中にはほぼ完形の土師器杯もみられる。

図111－1は#3から口縁を下に向けた状態で，斜位で出土している。完形品である。#3は自然堆積土なので，転落した土器の可能性もある。底部から丸みをもって立ち上がり，口縁部は直線的に外傾する器形を呈する土師器杯である。体部調整は，多段の回転ヘラケズリである。同図2は床下ピットから出土した。土師器杯の完形品で，1とは異なり，底部から直線的に立ち上がる。体部調整は回転ヘラケズリが用いられ，その幅は広い。これらは，器形に若干の差異が認められるが，おおむね9世紀中頃に位置づけられる。

同図3・4は甕の底部を図示した。3は小型甕である。4の体部下端には，カマド構築材とみられる粘土の付着が認められる。5は須恵器長頸瓶の体部片で，肩部から底部付近まで約20%が遺存する。胎土には，砂粒が目立つが緻密である。以上の遺物について，正確な年代は不明だが，土師器杯の年代と大きな矛盾はない。6は#1から出土した砥石である。遺構内堆積土が人為であるので，本住居跡に近い年代を与えることも可能である。

ま と め

本住居跡は，重複する6軒の住居跡で最も古い時期の住居跡で，規模も最小である。住居跡の新

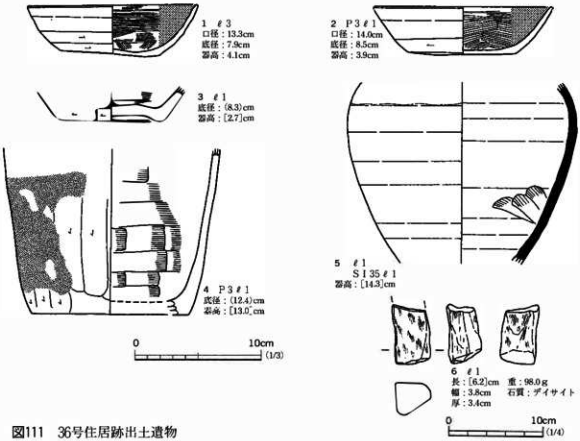


図111　36号住居跡出土遺物

旧関係と遺構規模をみると，新しい住居ほど西方にずれ，規模が拡大していくようである。

ここで注目したいのは，本住居跡とＳＩ29ａとで溝跡による間仕切りが類似している点である。また，本住居跡の上位に構築されたＳＩ29ａとＳＩ35からは，鍛冶炉とみられる焼面が検出されるなど，同一地点に構築された６軒の住居跡にはいくつかの共通点が挙げられる。つまり，住居が連続的に構築された理由の一つに，機能・性格の継続性があった可能性も考えられる。

出土遺物をみると，貼床の上下で年代差は考えにくい。したがって本住居跡の所属時期は，平安時代前葉に位置づけられる。　（佐　藤）

37号住居跡　ＳＩ37

遺　　構（図112，113，写真63）

本住居跡は調査区西部のＡ１－Ｇ10・Ｈ10，Ａ２－Ｇ１・Ｈ１グリッドに位置し，小支谷に面した尾根肩部に立地する。検出状況はＳＩ31の貼床内にカマドの焼土面を確認し，その斜面下方のＬⅤにおいて中央のＬⅢ由来の黒褐色土を取り囲む暗褐色土の堆積範囲を住居跡と判断した。ＳＩ31との新旧関係は本住居跡がＳＩ31の貼床を切っていることから本住居跡の方が新しいと判断される。堆積土は４層に分層される。ℓ２～４としたＬⅣ再堆積土のつくるくぼみにℓ１とするＬⅢ基調の土が堆積していることから自然に埋没したと考えている。

平面形は方形を基調とするが，北東角は丸く，南東角は鋭角をなし不整である。南東隅は風倒木

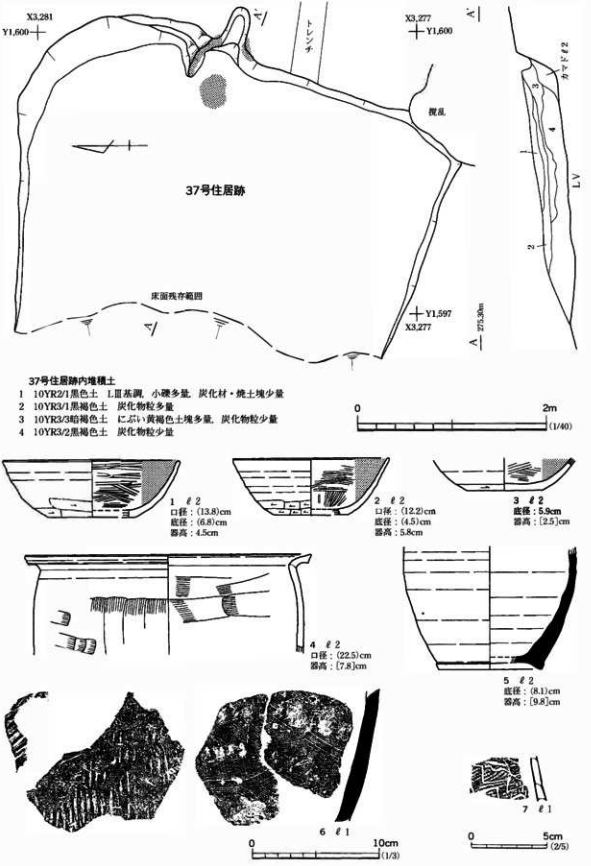


図112　37号住居跡（1），出土遺物

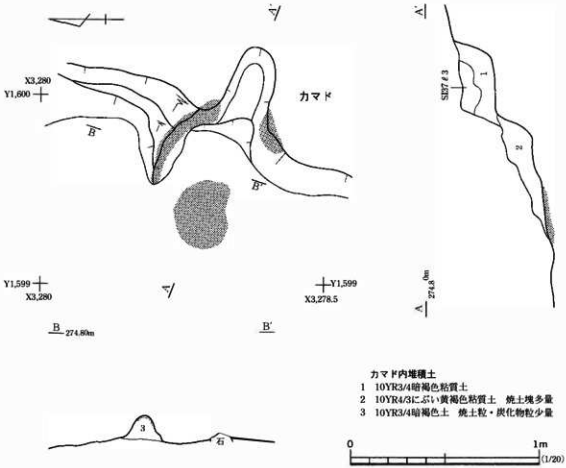


図113　37号住居跡（２）

によって壊され，斜面下方にあたる西壁は失われている。規模は東壁の長さから約4.5m四方と推測される。掘り込みはＬⅣから行われ，床面はＬⅤに達する。貼床はなされず，床面は斜面に沿って西側に下り勾配となっている。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は皿状を呈している。

カマドは斜面上位の東壁ほぼ中央に燃焼部と煙道の掘り込みの一部が検出されている。残存する左袖の形状から推測するに，燃焼部は長方形を基調とした形状を呈するかと思われる。燃焼部の右袖は確認できなかったものの，左袖は40cm程東壁から張り出し，よく焼けている。袖の構築材はＬⅣを主体としており，地山掘り残しによるものかとも思われたが，炭化物・焼土粒を含んでいることからＬⅣを素材としているものと判断した。燃焼部底面は焼けてはいるものの，焼土化の度合いは弱い。煙道は長さ40cmにわたり，幅は20～25cm程度である。本来はＳＩ31堆積土中へと続いていたであろうが，検出時にはすでに削ってしまっており，煙出しの位置等は不明である。その他にピットなどは検出されなかった。

遺　　物（図112，写真106）

土師器147点，須恵器５点，弥生土器２点が出土している。７点を図示した。図112－１～３は土師器杯である。いずれもロクロ整形され，内面が黒色処理される。器形は１が内湾気味に立ち上がり，２は直線的に外傾している。体部下端は，１・２が手持ちヘラケズリ，３が回転ヘラケズリさ

れている。同図4はロクロ整形の土師器甕で，胴部は寸胴を呈し，口縁は強く外反して，端部は摘み上げられる。5・6は須恵器である。5は瓶の胴部下半，6は甕の体部である。7は弥生土器で，縄文地に沈線によって鋸歯状文を描く。弥生時代後期に属する資料かと思われる。

まとめ

本住居跡は谷部に作られた竪穴住居跡である。平面形は不整な方形を呈し，カマドが東壁に作られている。出土遺物から機能したのは平安時代と考えている。調査区西部で，平安時代前葉に比定される確実な例は本住居跡のみである。　（山　元）

38号住居跡　ＳＩ38

遺　構（図114，写真64）

本住居跡は，調査区東部の東向き斜面に存在し，Ａ2－Ｅ4グリッドに位置する。東方の斜面下には，村道が南北に走っている。検出面はＬＶ上面である。

西方の斜面上位には，本住居跡とほぼ同一グリッド内にＳＩ30ａ・30ｂ・33・34の4軒の竪穴住居跡が存在し，斜面を上りながら次々に重複している。また，切り合い関係にあるＳＩ33の床面西部には，ＳＫ43・44の2基の土坑も存在している。本住居跡は，これら重複する遺構群の最下層に位置し，最も古く，最も東方に存在している。この他周辺には，東方の斜面直下にＳＢ02があり，やや下ってＳＩ08・09が存在している。南東方向には，ＳＢ02・03およびＳＩ05～07・10・11等が密集している。

堆積土は8層に分層した。この内，❶1～7が住居内堆積土，❶8が貼床構築土である。❶1はＳＩ33掘形によって掘り込まれており，炭化物および焼土粒子をほぼ均一に含んでいる。ただし，混入される焼土粒子の量は少ない。この層はかなり厚みがあり，本住居跡周囲の堆積土であるＬＶにも類似していることから，自然流入土ではないかと判断している。❶2～4はＬⅦ塊を比較的多く含み，堆積状況から，人為堆積の可能性が高い。❶7は壁溝内堆積土で，ＬⅦ塊を多量に含んでおり，人為的に埋め戻されている。

本住居跡は，北側が調査区域外であるため，その全体像は不明確ではあるが，南壁と東西壁の一部が確認されている。それによると，本住居跡は調査区内では長方形の平面形を呈し，規模は東西4ｍを測り，南北は1.9ｍが検出されている。床面は，北西の一部では地山のＬⅦをそのまま削り，遺存範囲の中央付近から東部にかけては貼床である。貼床上面は平坦で硬く締まり，丁寧に整備されていたことが伺える。

周壁は，西辺と南辺で良好に遺存している。西壁は，急峻な立ち上がりを示し，壁高は65～70cmを測る。南壁も，西壁と同様に切り立った壁面を持つが，東に向かい高さを減じている。南壁の壁高は，斜面上位の西隅で66cmを測り，低いところでは30cm程度が遺存する。また，西壁及び南壁では，壁面に沿って連続した壁溝が巡っている。溝の深さは3～7cm，幅は15～20cmを測る。

遺存範囲からカマド及び柱穴は確認できなかった。

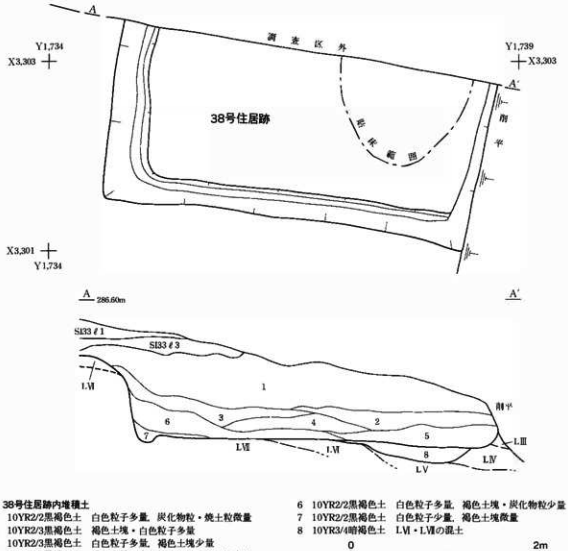


図114　38号住居跡

遺　物

本住居跡からは，ℓ１から31点，ℓ５から６点の土師器片が出土している。いずれも摩耗が著しく，５㎝にも満たない小破片であるため図示していない。多くは甕の胴部破片と見られ，杯の破片はやや少ない。この中で，ℓ１から出土した２点とℓ５から出土した１点の計３点の土師器杯小片が，ＳＩ33と接合している。

ま と め

本住居跡は，部分的な検出にとどまってはいるが，貼床と壁溝を伴った方形基調の小規模な竪穴住居跡と考えられる。ただし，柱穴及びカマドは検出されていない。重複する遺構群の中では，最も古い遺構である。正確な機能時期については特定できないが，出土土器と重複関係から，平安時代に属するのは間違いない。

（吉田昌彦）

第4節　掘立柱建物跡

本遺跡における掘立柱建物跡は3棟検出された。いずれも調査区東部に存在し，東に傾斜する谷地形の標高285m付近に構築されている。この内，2棟は周溝を伴う9世紀代の建物跡で，同時期の住居跡と近接している。集落内の倉庫とみられる。もう1棟は時期不明ながら，近世以降とみられる。付属施設が伴っていた可能性も指摘されている。周辺に同時期の遺構は存在しないが，本遺構の斜面下に，近世から利用されている村道が通っており，これに向かうように走る溝跡も検出されている。本遺構は，こうした道沿いに建っていた何らかの施設と考えられる。

1号建物跡　SB01

遺　　構（図115，写真65）

本遺構は，調査区東部のA3－G・H5グリッドに位置し，東向きの傾斜に立地している。周辺の包含層を精査中には，遺構の存在に気付かず，LⅦ上面で柱穴の並びが確認された。しかし，上記の経過を踏まえると，LⅦが遺構の掘り込み面とは考えにくい。南辺でSK01と重複し，それより新しいことが判明している。SK01はSK03と重複しており，双方が本遺構に伴っていた可能性もある。

本遺構は斜面に立地するため，東方が流失している。そのため，構造・規模については言及できない。西側を中心に3間×1間が検出され，柱穴は6個を数える。柱穴番号は，検出順に付している。軸線は西辺で北西を指し，周辺の等高線に平行することになる。規模は，西辺が5.74m，北辺が1.75m，南辺が2.10mを測る。柱穴芯々間の距離は，1.75～2.10mとばらつきがみられ，1.8m（6尺）前後が多い。

6個検出された柱穴は，径31～46cmを測る。西辺の柱穴が大型なのは，遺存状態が良好なためであろう。同様に，検出面からの深さも西辺の各柱穴の値が大きい。柱穴内堆積土はおおむね3層に分層され，いずれも暗い色調の土層が堆積している。これらは，周辺に存在するLⅢないし LⅤに類似している。各層ともしまりが弱い。P1などは，垂直に立ち上がる場合があり，柱痕の可能性が高い。しかし，P1・5・6では幅広くなる部分もあるので，柱の抜き取り痕と判断した。なお，本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は，遺存状態が悪く詳細は不明であるが，西辺は3間で構成されることが判明している。遺構に伴う遺物がないため所属年代は不明だが，堆積土の状況や間尺から推定すれば，近世以降の可能性が高く，その性格は宅地あるいは倉庫と考えられる。ところで，本遺構南辺にはSK01・03が接している。土層の切り合いから，時期差を想定するのが妥当だが，本建物跡に伴う施設と推定することも可能である。

（佐　藤）

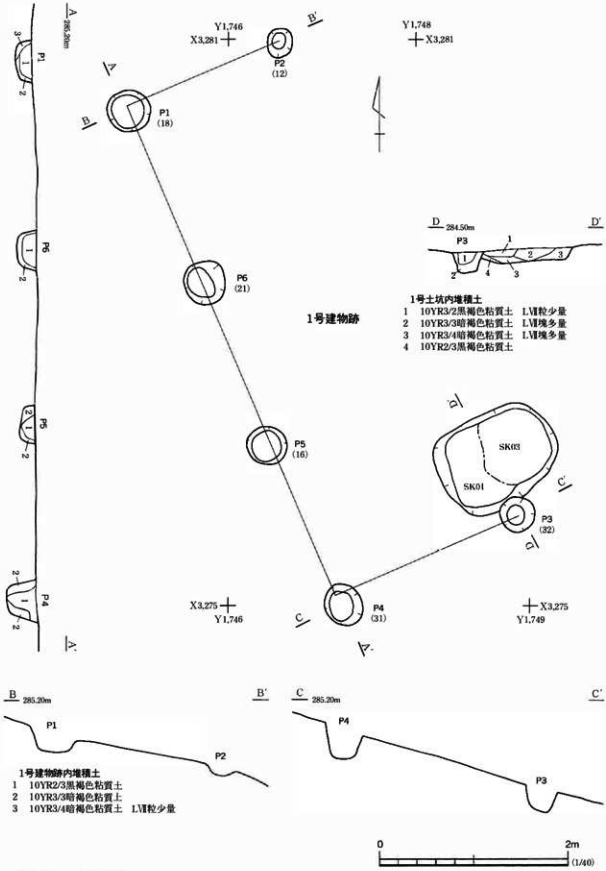

1号建物跡
P1 (18)
P2 (12)
P3 (32)
P4 (31)
P5 (16)
P6 (21)
SK03
SK01
Y1,746
X3,281
Y1,748
X3,281
X3,275
Y1,746
X3,275
Y1,749
D 284.50m D'
1号土坑内堆積土
1 10YR3/2黒褐色粘質土 LⅦ粒少量
2 10YR3/3暗褐色粘質土 LⅦ塊多量
3 10YR3/4暗褐色粘質土 LⅦ塊多量
4 10YR2/3黒褐色粘質土
B 285.20m B'
1号建物跡内堆積土
1 10YR2/3黒褐色粘質土
2 10YR3/3暗褐色粘質土
3 10YR3/4暗褐色粘質土 LⅦ粒少量
C 285.20m C'
0 2m
(1/40)

図115　1号建物跡

2号建物跡　SB02

遺　　構（図116・117，写真66・68）

本遺構は，調査区東部のA3－F5・6グリッドに位置し，小支谷に面する東向き緩斜面に立地している。周辺の標高は283m程度である。遺構検出時に，多量の土器と隅丸方形の平面プランが検出されたが，精査を進めたところ，LⅦ上面に至って周溝を伴う掘立柱建物跡と判明した。SB03と重複し，その一部を壊していることから，明らかに本遺構が新しい。また，SI10との重複は，不明であった。

本遺構は3間×2間の建物部と，西側に付属する周溝部からなり，柱穴は8個確認された。柱穴番号は南西部から時計回りに付した。建物跡は，規模が西辺で5.55m，北辺で5.65m，P3－P7間で5.83m，P2－P8間で5.70mを測る。遺構東方は斜面で流失した可能性も考えられるが，平面形や規模が整っていることを勘案して，その可能性は低いと判断している。柱穴芯々間の距離は，1.75～2.85mを測り，東西方向の値が大きい。西辺の軸線は，真北からやや西を指し，これは周辺の等高線にほぼ一致する。

柱穴は，円形のものと楕円形を呈するものに分けられ，規模は後者が大きい。また，楕円形の柱穴には，底面に柱材を据えた刳り穴状のくぼみが確認されることも多く，P1の南端には柱を立てかける際の法面も検出されている。以上の柱穴は，斜面上位の西側にのみ観察される。これに対し，円形の柱穴は東側にしかみられない。柱穴の規模は，楕円形のものが52～98cm，円形のものが24～50cmを測る。

周溝は，西辺から20～40cm離れて走っている。上端幅で35cm，深さ16cmの溝が長さ7.3mにわたり検出されている。周溝はP1・4付近で東に屈曲しているので，少なくとも三方は取り囲んでいたと思われる。溝跡内堆積土は，少量の混入物を含む黒色土なので，自然に埋没したものと判断された。

遺　　物（図117）

本遺構からは，土師器片173点，須恵器片2点が出土した。これには遺構検出時に出土した土器片も数えているため，厳密に遺構の年代を推定する資料となりえるのは，柱穴と周溝出土の遺物ということになる。この内2点を図示した。いずれもロクロを用いた土師器杯で，内面黒色処理されている。

1は周溝から出土した杯である。底部から体部下半が遺存し，ちょうどこの部位に回転ヘラケズリがなされている。わずかに丸みをもって直立する器形と推定される。9世紀中頃を中心とした時期に比定できよう。2は遺構検出段階で出土した。低い高台の付く杯で，内外面とも黒色処理される。高台は直立するタイプで，5mm程と低い。5%程度しか遺存せず，磨滅も進んでいるため，調整の観察は困難である。ただ，底面には回転ヘラケズリが施されているので，体部下半もそうである可能性が高い。これは9世紀後半に属するとみられる。

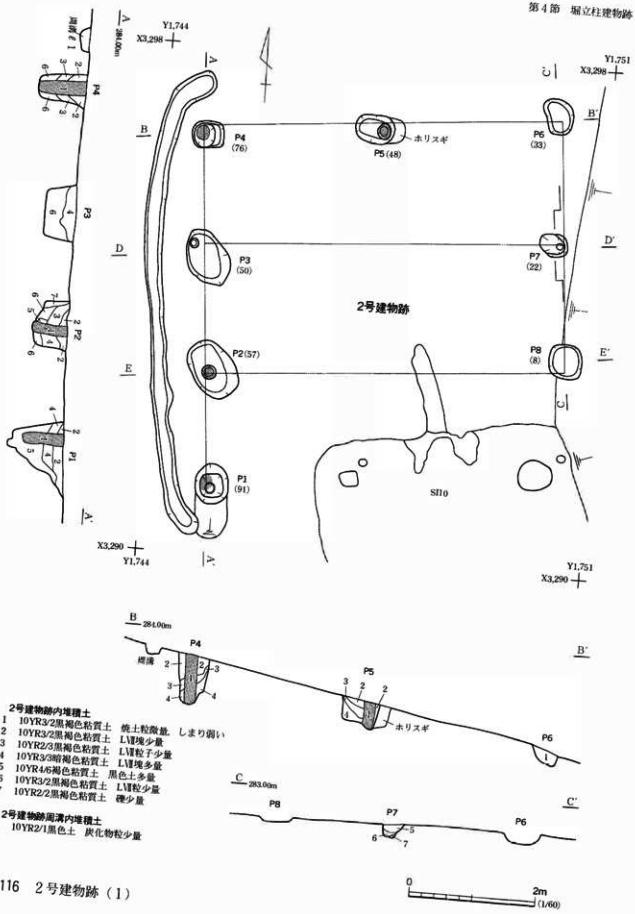

Y1,744
X3,298
Y1,751
X3,298
P4
(76)
P5(48)
ホリスギ
P6
(33)
P3
(50)
P7
(22)
2号建物跡
P2(57)
P8
(8)
P1
(91)
SI10
X3,290
Y1,744
Y1,751
X3,290
284.00m
P4
P5
P6
ホリスギ
283.00m
P8
P7
P6
2号建物跡内堆積土
1　10YR3/2黒褐色粘質土　焼土粒微量、しまり弱い
2　10YR3/2黒褐色粘質土　LⅦ塊少量
3　10YR2/3黒褐色粘質土　LⅦ粒子少量
4　10YR3/3暗褐色粘質土　LⅦ塊多量
5　10YR4/6褐色粘質土　黒色土多量
6　10YR3/2黒褐色粘質土　LⅦ粒少量
7　10YR2/2黒褐色粘質土　硬少量
2号建物跡周溝内堆積土
1　10YR2/1黒色土　炭化物粒少量
0
2m
(1/60)

図116　2号建物跡（1）

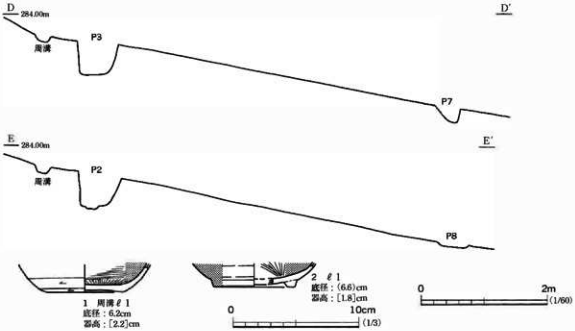


図117　２号建物跡（２），出土遺物

ま と め

本遺構は，周溝を伴う３間×２間の建物跡で，作り替えがある２棟の建物の内，新しい段階に属する。出土遺物から平安時代の所属と推定され，該期の住居跡との関連から倉庫の可能性が高い。出土遺物はＳＩ10より新しく，本来，ＳＩ10の堆積土中に柱穴が存在した可能性があるが，住居跡調査時に本遺構が認識されていなかったため，消失した可能性が高い。　（佐　藤）

３号建物跡　ＳＢ03

遺　　構（図118，写真67・68）

本遺構は調査区東部のＡ３－Ｆ５グリッドに存在する。ＳＢ02の精査中に，これに壊された柱穴を検出し，ＳＢ03と命名した。したがって，ＳＢ02より古いことになる。柱穴は，ＳＢ02柱穴の東に接して並んでいる。西辺を中心に３間×１間が検出され，南西から時計回りにＰ１～５と呼称した。Ｐ５より東方の状況については，斜面に立地しているため言及できない。軸線は，西辺でＮ６°Ｗを指し，これはＳＢ02の軸線とほぼ共通し，周辺の等高線に平行している。規模は，西辺が5.6m，Ｐ４－５間が2.15mを測る。柱穴芯々間の距離は，1.8～2.15mを測り，Ｐ４－５間が長いのに対し，西辺の間隔は一定している。

５個検出された柱穴は，平面形が円形ないし楕円形を呈し，前者が多く，規模は径28～86cmを測り，Ｐ３がやや大きい。こうした特徴は，ＳＢ02の柱穴とは若干相違している。柱痕が確認できたのはＰ４のみで，上面の立ち上がりから，抜き取られたものと推定される。なお，Ｐ２の東部約2.1mには，ピット状の落ち込みがみられた。この落ち込みは浅く，調査時は遺構と認めなかったものである。ただ，位置的に本遺構を構成する柱穴の痕跡の可能性があるため，図化しておいた。

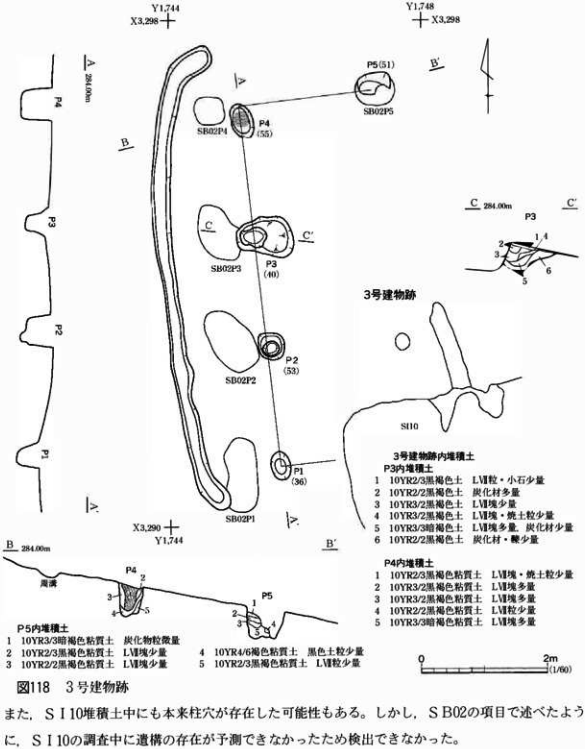


図118　３号建物跡

また，ＳＩ10堆積土中にも本来柱穴が存在した可能性もある。しかし，ＳＢ02の項目で述べたように，ＳＩ10の調査中に遺構の存在が予測できなかったため検出できなかった。

また，本遺構の西側に接して，ＳＢ02で述べた周溝が走っている。周溝と各ピットとの間隔は，１～1.3mを測り，ほぼ一定している。この周溝は，本遺構にも伴う可能性が高い。

遺　　物

本遺構からは，Ｐ２・３より土師器７点が出土した。柱穴内埋土中の出土なので，遺構の上限を示す遺物といえる。図示できる資料はないが，時期が推定できる土器として，ロクロ整形の杯があ

り，9世紀代に比定される。

まとめ

本遺構は，SB02を東方に縮小したような形状を呈する建物跡で，P5の東側は不明である。SB02・周溝と軸線が共通することから，これらと大きな時間差は考えられず，同じ建物の作り替えと考えることができる。出土遺物も大差ないことから，本遺構の年代は9世紀後半を大きく遡るものではない。　（佐藤）

第5節　竪穴状遺構

本遺跡からは，掘形と遺物の出土に特徴付けられる古墳時代の遺構が確認された。この内，整った形状の掘形をもつ1基を竪穴状遺構として扱っている。竪穴状遺構は，住居跡や貯蔵施設などと考えられるが，性格を示す明確な所見は得られていない。

1号竪穴状遺構　SX01

遺　構（図119，写真69）

本遺構は，調査区西側，A2－G7グリッドに位置する。周囲の地形は東から西へ下る急斜面である。遺構検出面はLⅥだが，LⅤ～Ⅵ精査時にすでに土師器片が集中して出土していた。この付近は撹乱も多く，遺構の検出は困難を極めた。一部断ち割り調査を実施しながら遺構範囲の確認に努めた。その結果，方形に近いプランを検出した。検出面の標高は289.46～290.08mで，62cmの比高がある。斜面下にあたる遺構の西側2.5m先には，大型の竪穴住居跡であるSI17がある。重複する遺構はないが，北側に大きい撹乱が入っており，遺構が壊されている。

精査は，東西に土層観察ベルトを設定し，掘り込みを開始した。堆積土は比較的薄く，自然堆積の1層のみである。斜面に対して水平に掘り込まれた平坦面と低い立ち上がりを検出した。遺構の平面形は南北に長い不整形な長方形だが，西側は底面が斜面下に崩落して失われている。規模は残存値で南北長が1.6m，東西長が1mほどである。東端の壁は72°の角度で立ち上がり，最高で18cmを測る。

遺　物（図120，写真107）

本遺構から出土した遺物は，弥生土器片1点，土師器片250点，須恵器片6点である。しかし，本遺構は調査区の西側斜面の高位置にあり，斜面下の遺構外や他遺構内に多数遺物が流出している。斜面下で出土した破片と接合する土器が多くあり，これらは本遺構出土の遺物として扱う。図示できたのは，土師器12点，須恵器2点である。

土器は主に遺構南寄りから，ほぼ南北方向に直線的に並んで出土した。遺構底面からやや浮いており，一部は土器が重なっている。離れた位置にある破片が接合し，土器の向きも不規則であることから，原位置ではなく崩落したもの，あるいは破片で廃棄されたものである可能性が高い。

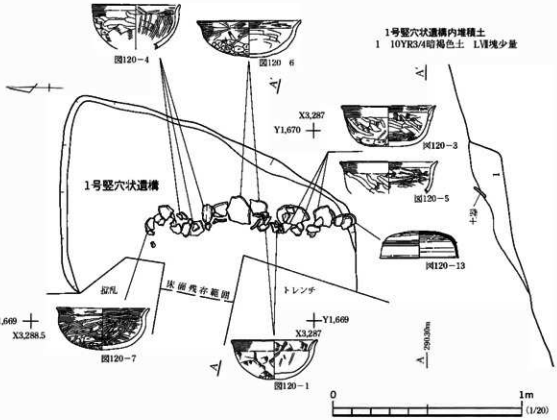


図119　1号竪穴状遺構

図120－1～9は土師器の杯である。すべて図119で示した土器集中範囲から出土した。内湾する体部に外反あるいは外傾して開く口縁部がつく形状である。内面には稜をもつ。底部を欠くものもあるが，ほとんどが丸底と思われる。ただし，3は明確につくり出してはいないが，底部が平底風になっている。いずれも色調は明赤褐色で，胎土は精選され，焼成も良好である。細かな器形の差異をみると，1や4が口縁部の開きが小さいのに対し，8・9は大きく外傾して開く。2はやや頸部が立ち気味になってから開く。また，口縁部の製作技法も1や3は内面に粘土を貼り付けて厚くし，稜を形成しており，8は体部と口縁部の接合部が明確であることなど，個々で異なる。体部の形状は，3のように比較的四角く，深いものもあれば，6のように平たく浅いものもある。寸法は2が小ぶりであるほかは，大きな差はないと思われる。調整は基本的に外面の体部にナデ，底部にケズリがみられ，内面はナデ後ミガキをいれるものが多い。口縁部にはヨコナデが入る。その中で特に，2～5・9の外面には最終的な調整として，幅広で単位が大きいミガキ状の調整が入る。6・7は細かいミガキが入る。内面のミガキは，2・4・8・9のように放射状に施されているものや，3・5のように横方向のものなどがある。2～4・6などは口縁部にもミガキが施されている。7は内外面ともに密にミガキが入っている。

10は土師器の杯と認識する。土器集中範囲の上層とℓ1中，斜面下のSⅠ17ℓ1から出土した破片が接合した。もともと本遺構に所属していた土器が流出したものであろう。丸底で内湾して立ち

上がる浅い体部から口縁部が内傾する器形であり，1～9の杯とは区別される。外面体部はナデ，底部はケズリ，口縁部はヨコナデ，内面はナデ後にまばらな放射状のミガキで調整されている。色調は明赤褐色で，焼成も良好である。

11・12は土師器の甕で，底部の破片である。ℓ1中から出土した。平底の底部から胴部が大きく膨らむ形状と思われ，底部径や立ち上がりの角度などから両者とも同じくらいの大きさの甕と考えられる。色調はにぶい黄橙で器面が荒れており，質感や胎土も類似している。11は外面にケズリ，内面にナデがみられ，外面の上部にはすすが，内面の底部に炭化物が付着している。12は内外面ともに調整が確認しづらいが，ナデの痕跡が若干みられる。

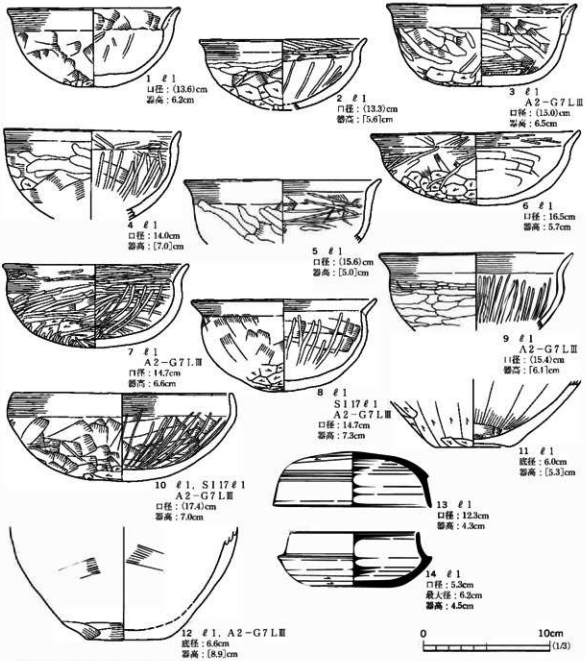


図120　1号竪穴状遺構出土遺物

13・14は須恵器の蓋杯である。13が蓋，14が杯で，両者ともほぼ完形である。遺構検出時にこれらの主な破片が重なって出土しており，蓋と身の大きさ，かみ合わせともに良好で，対になるものと思われる。ただし，接合した破片は土器集中範囲の中や斜面下のＳＩ17にも散在していた。13の形状は，天井部が丸みをもち，天井部外面の２／３ほどに回転ヘラケズリが施されている。口縁部はやや内湾して下がり，端部は外側に若干開き，その内側は凹面をなす。天井部と口縁部の境には短いが比較的鋭利な稜がつく。稜の上下には浅く断面凹状の調整が巡る。外面には全体的に灰緑色の自然釉が付着している。14の形状は，底部がわずかにくぼみ，体部が内湾する。底部外面２／３ほどに回転ヘラケズリが入る。立ち上がりはやや内湾した後，上方に延び，端部の内側は段に近い凹面をなす。受け部は上外方に延びる。いずれも，蛍光Ｘ線による胎土分析を行い，大阪府陶邑窯産の可能性が高いとの結果を得ている。

まとめ

本遺構は，急斜面上に立地している。遺構底面は，ほぼ水平を意識して掘り込まれていると思われ，土器が集中して出土していることから，なんらかの遺構であることは間違いない。方形に近い形状から竪穴住居跡の可能性があるが，大部分が撹乱や流出で失われており，住居跡といえるだけの施設も検出できず，確証は得られなかった。すぐ斜面下には，大型のＳＩ17があり，本遺構から出土した土師器はＳＩ17とほぼ同時期と考えられる。したがって両遺構が並存していた可能性もあり，位置関係から住居跡に付属する施設であったとも考えられる。

本遺構の年代は，出土した須恵器が陶邑編年のＩ形式５段階，ＴＫ23並行期と考えられ，５世紀末頃といえよう。これは共伴する土師器の年代観とも矛盾しない。　（渡　藤）

第6節　土　　坑

今回の調査では45基の土坑が検出され，これを時代と推定される性格を基準として以下の９類に分類した。おおむねＩ類土坑が縄文時代，Ⅱ類土坑が弥生時代，Ⅲ類土坑が古墳時代，Ⅳ～Ⅶ類土坑が奈良・平安時代，Ⅷ類土坑が近世に属し，Ⅸ類土坑は時代・性格とも不明なものである。

記述にあたり，遺物も含めた土坑の記載は分類ごとに概述・図示し，必要に応じて個別の説明を加えることとする。土坑個別の計測値および調査所見については，表３の土坑一覧表において記述しているので，参照されたい。なお，写真図版については基本的に遺構番号順に掲載している。

Ｉ類土坑　（ＳＫ15・18・19・42）

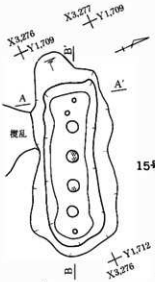
遺　構（図121，写真72～74・80）

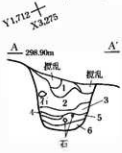
縄文時代に属するとみられる土坑を一括した。本類は，長径：短径比が大きい長方形もしくは楕円形を呈する深い土坑で，いわゆる落し穴とされる土坑である。ＳＫ15・18・19・42の４基が本類に該当する。なお，本類土坑は周壁の崩落に伴って遺構の形状および規模が大きく変わっている場

表3　奥木内遺跡土坑一覧

遺構No.	挿図	写真	グリッド	分類	規模(cm) 長径	短径	深さ	重複関係	出土遺物の種別
1	115	70	A3－H5	Ⅸ	129	95	16	SK03→, →SD01	
2	125	70	A3－G5・H5	Ⅳ	144	(55)	27		±12
3	137	70	A3－H5	Ⅸ	110	83	57	→SK01	
4	122	70	B3－A1	Ⅱ	150	146	30		弥3, ±8
5	122	70	B3－A1	Ⅱ	135	(77)	40		管玉1
6	122	70	B3－A1	Ⅱ	85	63	16		縄1, 弥12
7	122	70	B3－A1	Ⅱ	75	62	16		
8	122	71	B3－A1・A2	Ⅱ	168	86	26		弥1
9	122	71	B3－A1	Ⅱ	130	100	29		弥10
10	123	71	B3－A1	Ⅱ	131	(117)	31		弥2
11	131	71	A3－J7	Ⅴ	282	(140)	74	SK13→	縄6, ±1
12	131	71	A3-J7, B3-A7	Ⅴ	232	130	77		±2
13	133	71	A3－J7	Ⅶ	187	128	76	→SK11	
14	132	71	A3－H3	Ⅴ	210	178	150		
15	121	72	A3－H1・H2	Ⅰ	215	73	95		縄3, ±19, 紡錘車1
16	126	73	A3－H1	Ⅳ	160	81	22		±13
17	136	73	A2－F1	Ⅶ	118	87	62		±15, 鉄1
18	121	73	A2－G7	Ⅰ	(156)	83	33	→SI17	±1
19	121	74	A2－F7・G7	Ⅰ	187	64	115		
20	136	75	A2－G3	Ⅶ	78	71	17		±4
21	133	75	A2－F6	Ⅵ	(133)	84	78	SD06→	
22	126	75	A3－D1	Ⅳ	93	49	21	SI25・24→	
23	126	76	A2－F2	Ⅳ	159	148	18		±39
24	124	77	A2－G5	Ⅲ	395	345	59		弥2, ±487
25	135	76	A2－G3	Ⅶ	512	203	108		±109, 須1, 鉄2, 銭2, 陶1
26	137	76	A2－E10	Ⅸ	97	85	13	→SD04	±18
27	126	75	A3－E1・E2	Ⅳ	221	87	32	SK36→	弥1, ±4
28	134	78	A3－D2・E2	Ⅶ	282	140	40	SI29a→	±34, 須1
29	133	78	A3－E2	Ⅵ	100	48	19		
30	127	78	A3－E2	Ⅳ	160	136	42		±4
31	134	78	A3－E2	Ⅶ	128	112	22		±2
32	137	78	A2－D6	Ⅸ	57	56	82		±17, 須1
33	127	78	A3－E2	Ⅳ	93	88	39	→SK34	±27, 須1
34	127	78	A3－E2	Ⅳ	130	66	48	SK33→, →SD04	±6, 須1
35	127	79	A3－D2	Ⅳ	155	134	59	SI29a・SK38→	±60
36	127	79	A3－E2	Ⅸ	44	38	15	→SK27	±5
37	133	79	A2－C10	Ⅵ	77	(53)	36		
38	127	79	A3－D2	Ⅸ	57	(50)	24	SI29a→, →SK35	
39	137	79	A3－E3・E4	Ⅸ	88	61	28		±4, 須1
40	123	79	A3－J2	Ⅱ	80	68	61	→SG01	
41	137	79	A3－E4	Ⅸ	144	68	37		±29
42	121	80	A1－H10	Ⅰ	(140)	100	65		±2
43	128	80	A3－E4	Ⅳ	(100)	(70)	72	SI33→, →SI34・30	±96, 粘土塊1
44	128	80	A3－E4	Ⅳ	167	118	69	SI33→, →SI30	±185, 石1, 粘土塊2
45	137	79	A3－E2	Ⅸ	80	52	42	SI36・35・32→, →SD07	±2

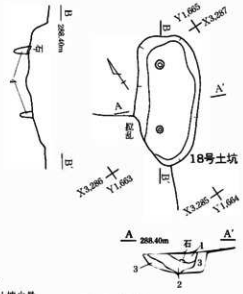
重複関係：古→新
縄：縄文土器　弥：弥生土器　土：土師器　須：須恵器　陶：陶磁器　石：石器　鉄：鉄製品　銭：古銭
Ⅰ期土坑の長径・短径については、中縄を計測した。





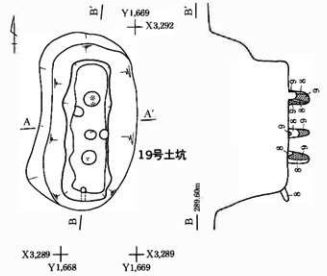
15号土坑内堆積土

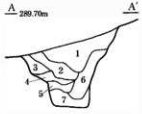
1　2.5Y4/4オリーブ褐色土　炭化物粒微量
2　2.5Y4/4オリーブ褐色土　にぶい黄褐色土塊少量
3　2.5Y4/6オリーブ褐色土　白色砂粒少量
4　2.5Y4/6オリーブ褐色土　白色砂粒少量
5　2.5Y5/4黄褐色土　白色砂粒少量
6　2.5Y4/4オリーブ褐色土　白色砂粒少量
7　2.5Y5/4黄褐色粘質土
8　2.5Y6/4にぶい黄褐色砂質土　黄褐色土粒少量
9　2.5Y5/2灰オリーブ色砂　暗褐色土少量



18号土坑内堆積土

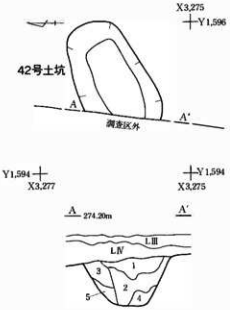
1　10YR4/6褐色土　パミス少量
2　10YR3/4暗褐色土　パミス少量
3　10YR4/6褐色土　パミス少量
4　10YR3/4暗褐色土　黒色土塊微量





19号土坑内堆積土

1　10YR2/3黒褐色土　L Ⅶ塊多量，白色砂微量
2　10YR3/4暗褐色土　L Ⅶ塊，白色砂微量
3　10YR3/4暗褐色土　黒色土塊少量
4　10YR3/4暗褐色土　オリーブ黄色砂質土塊少量
5　10YR4/3にぶい黄褐色土
6　10YR4/4褐色土　黒色土塊微量
7　7.5YR4/4褐色土　オリーブ黄色砂質土塊少量
8　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
9　2.5Y5/2暗灰黄色砂質土　黄褐色土粒少量



42号土坑内堆積土

1　10YR3/3暗褐色土　黒褐色土塊多量
2　10YR2/2黒褐色土　灰黄褐色土塊少量
3　10YR3/4暗褐色土　黒褐色土塊微量
4　10YR3/2黒褐色土
5　10YR4/4褐色土　L Ⅶ塊基調。
　　黒褐色土粒多量

0　2m
(1/50)

図121　Ⅰ類土坑　15・18・19・42号土坑

合が多い。そこで，本稿では遺構の形状を残す中端を基準として記述を行っている（用例参照）。

分布の状況は調査区西部の谷底に1基，丘陵斜面上部に3基と散在している。いずれも西向き斜面に位置する特徴がある。遺構内堆積土はおおむねⅡ～Ⅴ類似の黒色土・褐色土と，Ⅵ起源の黄色系の土がレンズ状に堆積し，明らかな自然堆積の状況を呈している。特に，黄色土が厚く堆積する部分では上部の周壁が崩落し，遺構の形状が大きく歪んでいる（SK15・19）。また，遺構下部のみ遺存するSK18には，沼沢パミス（NP）と推定される軽石片が確認されている。

土坑の形態は一様ではない。平面形は，SK15・19が壁面の崩落によって若干ゆがむものの長方形，SK18・42が楕円形を呈する。SK15の底面は，両端部が若干広がる形状を呈している。坑底施設は長方形の2基には5個以上検出されているのに対して，楕円形を呈する2基からは2個のみ，もしくは全く確認できていない。土坑による差が顕著である。坑底施設の中には，棒状の痕跡が確認された例もある。

これらの土坑は，規模や分布に規格性が認められないことから，相互の関連性は希薄で，個別に掘られたものだと考えられる。ただし，SK15・19は形状や坑底施設に類似性が指摘でき，同時存在した可能性も否定できない。また，丘陵斜面上部の3基（SK15・18・19）はいずれも等高線に平行に構築されている。SK42は等高線と直交しているように見えるが，これは周辺が大きく削平されているためで，本来，谷の等高線は本遺構の長軸に平行していたと推測される。このことから，Ⅰ類土坑全てが，同様の狩猟形態に伴わせようとした意図の下に掘り込まれた遺構であると言うことも可能であろう。

遺構各々の細かい時期は不明であるが，SK18の堆積土中には含まれるNPの存在から，縄文時代に比定されるのは間違いないであろう。SK18の所見からはNP降下時期と大きな時間差はないように思われる。なお，出土遺物はいずれも細片のため図示し得なかった。

Ⅱ類土坑　（SK04～10・40）

遺　　構（図122・123，写真70・71・79）

弥生時代に属する土坑を本類とする。SK04～10・40の8基が本類に比定される。全て調査区南東部の丘陵頂部に位置しており，ほとんどの土坑から弥生時代の遺物が出土している。また，堆積土がSK10で黒褐色土を基調としている他は，周辺土壌と土質の近似した褐色系の土を基調とする共通性が指摘されることから，近い時期に機能していたものと判断している。

平面形は楕円形（SK06・07・09），整った長楕円形（SK05・08），方形基調（SK40），円形（SK10），不整形（SK04）など様々である。規模もまた最大径75～168cmとばらつきがある。深さはいずれも浅く，15～39cmを測る。SK10を除いて，底面に硬化面などは存在せず，その性格は不明である。ただし，堆積土の観察によれば，いずれも混入物が多く人為堆積土と判断されている。また，SK06・07では比較的多量の礫が出土している。遺構の底面や周辺に礫層が露呈する地区とはいえ，その量は特異な印象を受ける。さらに，SK05から管玉が出土していることを勘

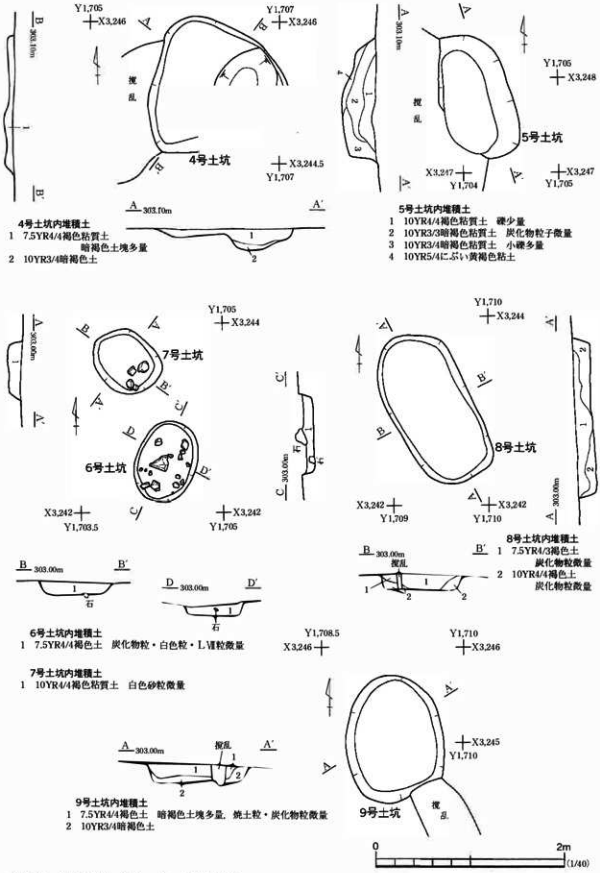


図122　Ⅱ類土坑（1）　4～9号土坑

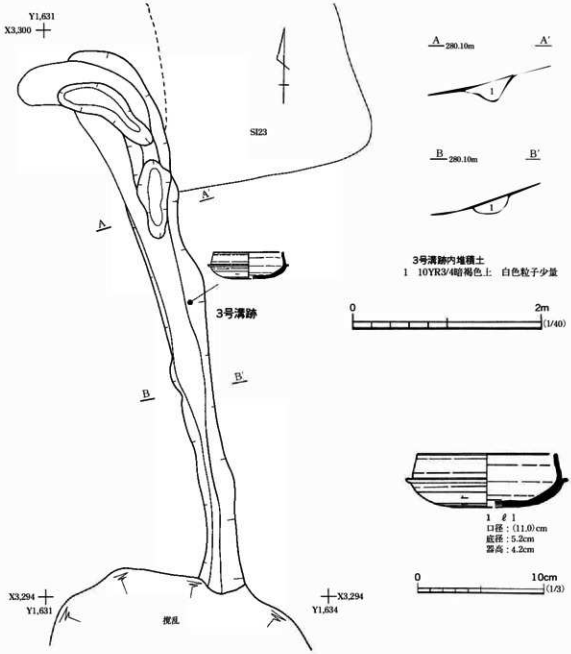


図140　３号溝跡，出土遺物

の湾曲は，あたかも標高295mの等高線を囲むかのように走っている。溝跡は，全長24.2mにわたり検出された。最大幅は東端で1.6mと広く，西方では70～80cmとほぼ一定している。底面は，東部がⅠ.Ⅶ，西部で軟質な岩盤を平坦に整え，断面形は箱形を呈する。また，同様の所見は，ℓ２の踏み締まり上面でもあてはまる。本遺構から，土師器３点，須恵器１点が出土した。いずれも小破片であり，他遺構との重複から考えても，遺構に伴う遺物とはいえない。

本遺構は，整った形状と一定の幅をもつことから，道跡と推定される。調査前はこの部分に，尾根に向かう山道が存在しており，ちょうど本遺構の湾曲部で，南北に走る山道と合流していた。したがって現在まで機能したのは間違いない。その構築年代について言及する根拠はもたないが，ℓ

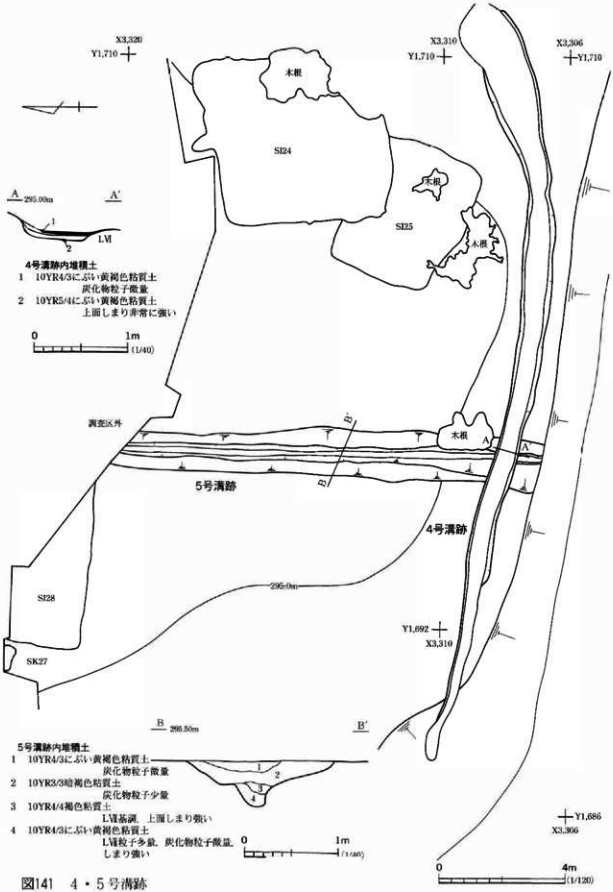

X3,320
Y1,710
X3,310
Y1,710
X3,306
Y1,710
木根
SI24
SI25
A
295.00m
A'
1
2
LVI
4号溝跡内堆積土
1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
炭化物粒子微量
2 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
上面しまり非常に強い
0
1m
(1/40)
調査区外
B2
B2
木根
A
A'
5号溝跡
4号溝跡
295.0m
SI28
SK27
Y1,692
X3,310
B
295.50m
B'
5号溝跡内堆積土
1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
炭化物粒子微量
2 10YR3/3暗褐色粘質土
炭化物粒子少量
3 10YR4/4褐色粘質土
LⅥ基調、上面しまり強い
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
LⅥ粒子多量、炭化物粒子微量、
しまり強い
0
1m
(1/40)
Y1,686
X3,306
0
4m
(1/120)

図141 4・5号溝跡

2下に古段階の底面が存在することをふまえると，近世まで遡る可能性が高い。　（佐　藤）

5号溝跡　SD05（図141，写真82）

本遺構は，調査区中央部のA2－C・D・E10グリッドに位置する溝跡で，尾根頂部に立地している。遺構はLⅥで検出された。遺構南部でSD04と重複し，SD04に壊されていることから，本遺構が古いことがわかる。

本遺構は，上端から緩やかに傾斜して一旦底面に至り，底面中央付近が薬研状にさらに深くなる形状の溝跡で，13.8mにわたり検出された。北側は調査区外に延び，南側は削平されていることから，遺構の全貌をうかがい知ることはできない。遺構の軸線はほぼ南北を指し，これはちょうどSD04と直交することになる。

遺構内堆積土は，傾斜の緩やかな上部と薬研状を呈する下部とで異なっている。つまり，LⅥを多量に含む下部が明らかに人為堆積を示しているのに対し，上部は人為堆積か自然堆積か判断に苦慮されるのである。下部に堆積していた1・3・4の上面は，比較的締まっており，踏み締まりと判断した。したがって，本遺構の性格は，道跡と考えられる。

出土遺物は，土師器片8点，石器1点を数えるが，いずれも本遺構には伴なわず，遺構の年代も不明だが，SD04と直交するなど，近接した年代を想定することもできる。　（佐　藤）

6号溝跡　SD06（図142・143，写真81・114）

調査区西部のA2－E・F6グリッドに位置する。本遺構は2本の小支谷に挟まれた尾根上に位置する。斜面の2m下位にはSI27が隣接する。遺構の周囲の地形は本遺構を境として斜面の傾斜が緩くなり，ちょうど段切り状の平坦面が本遺構から舌状に飛び出した格好になっている。検出面は基盤の凝灰岩で，南北に伸びる暗褐色土の堆積範囲を本遺構とした。調査当初は敷軒の住居跡・土坑が重複したものとして把握し，かつ複数の引渡し範囲にまたがるため細切れに調査したが，完掘した結果，東辺が同一な壁面となっていることから1条の溝跡として捉えることとした。東辺でSK21と重複し，検出時の平面形から本遺構の方が古いと判断した。遺構は南北に伸びているが，等高線に沿うように10°程東に振れる。端部は西に向かって鈎手となり，SI27を囲むような状況を呈する。北半は溝状に掘り込みが残るが，南半は西壁が遺存せず，平坦面が続くのみとなっている。底面標高は北半が284.5m，南半が284.7mと南に向かって下り勾配となる。

遺物は土師器片228点，須恵器片3点が出土している。その内5点を図示した。図143－1は土師器有段丸底杯で，浅い底部から段を有して，外傾する幅広の口縁部へとつながる。同図2～4は土師器甕である。2・3は倒卵形の胴部から「く」字状に屈曲し，肥厚する口縁部へとつながる。2は特に強く屈曲している。4は頸部の屈曲が弱く，口縁部は幅広である。5は須恵器大甕の底部破片で，縦方向に配したタタキメを数条横位に磨り消して区画している。

本溝跡は出土遺物から8世紀の遺構と考えられ，SI27との位置関係を考慮しても，この2基の

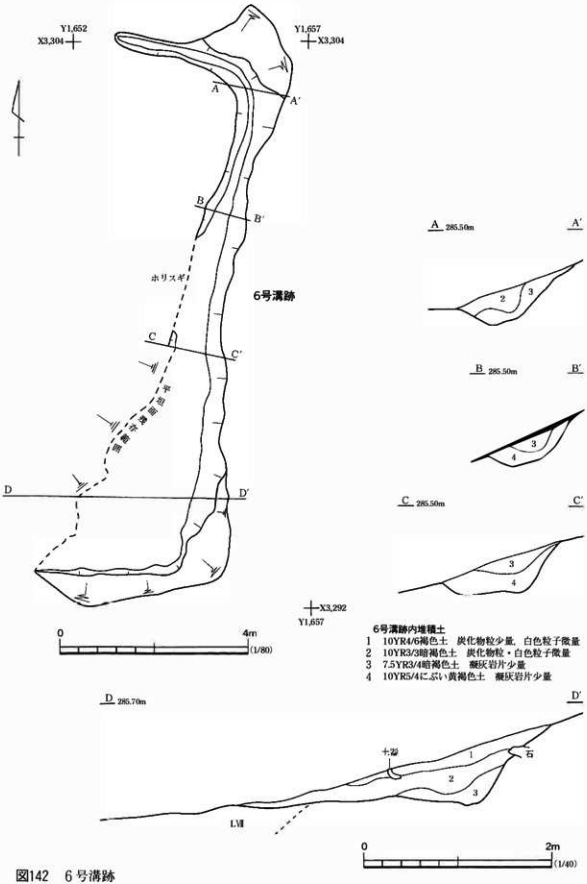

Y1,652
X3,304
Y1,657
X3,304
A
A'
B
B'
ホリスギ
6号溝跡
C
C'
D
D'
X3,292
Y1,657
0
4m
(1/80)
A 285.50m
A'
B 285.50m
B'
C 285.50m
C'
6号溝跡内堆積土
1 10YR4/6褐色土 炭化物粒少量, 白色粒子微量
2 10YR3/3暗褐色土 炭化物粒・白色粒子微量
3 7.5YR3/4暗褐色土 頁岩片少量
4 10YR5/4にぶい黄褐色土 頁岩片少量
D 285.70m
D'
十器
石
LVII
0
2m
(1/40)

図142 6号溝跡

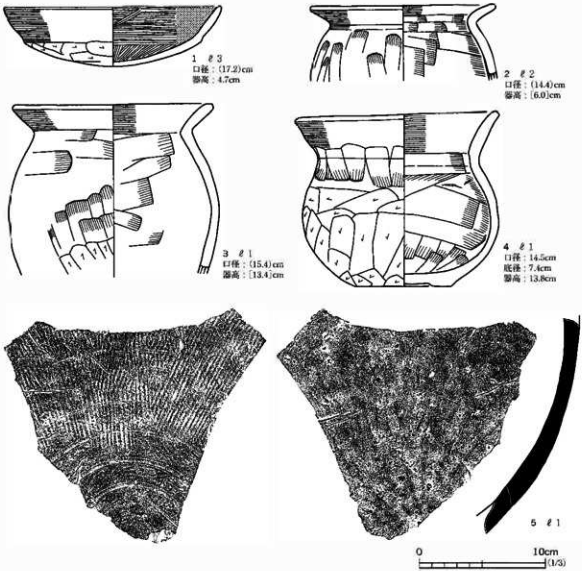


図143　6号溝跡出土遺物

遺構は同時期に存在したものであろう。その性格はＳＩ27の存在する平坦部を段切り状に区画し，同時にこの平場の排水を行うものと推測される。　（山　元）

7号溝跡　ＳＤ07（図144，写真87）

本遺構は，調査区中央部のＡ３－Ｅ２グリッドに位置する時期不明の溝跡である。周辺は南北に延びる尾根を形成しており，本遺構は東向き斜面の谷頭付近に立地している。遺構検出面は南部でＬⅦ，北部ではＳＩ36堆積土中であるのが確認されている。したがって，本遺構が新しいことが分かる。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれも自然堆積と判断された。ℓ２に混入物が多いのは，周辺に遺構が集中しているため，それらの堆積土が流入したものと考えられる。

本遺構は，長さ6.8mが検出され，北部は調査区外に延びている。幅は最大で1.72mを測るが，西部は周壁の崩落により広がったことは明らかで，崩れたＬⅦが主体となってℓ２が堆積したと考え

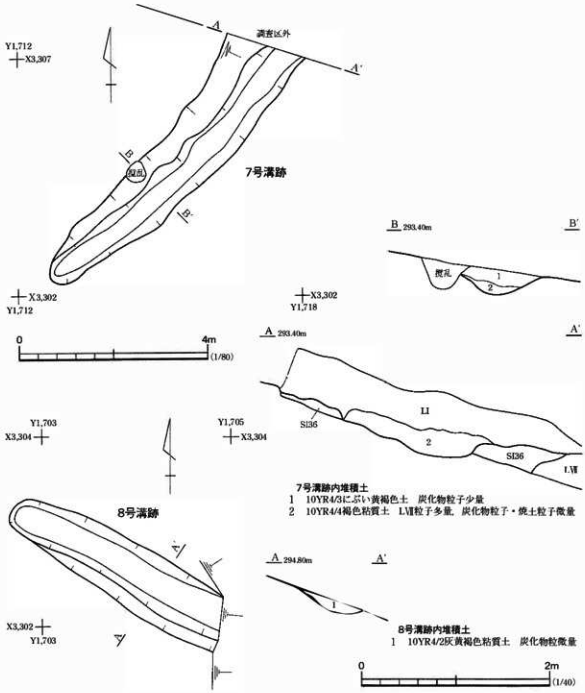


図144　7・8号溝跡

られる。遺存部から推定すれば，本来は，90cm程であったと推定される。底面は，断面形が丸底状を呈し，地形に沿って北に傾斜している。

本遺構からは，土師器片63点，須恵器1点が出土した。遺物量が比較的多いのは，本遺構が住居跡を壊していたり，遺構集中区に近接しているためと考えられる。遺物は本遺構には伴わない。

本遺構の性格は不明だが，斜面に沿って延びる点を勘案すれば，区画溝あるいは道跡のいずれかの可能性が高い。年代は，出土遺物から古代よりは新しそうである。　（佐　藤）

8号溝跡　SD08（図144）

本遺構は，調査区中央部からやや南方のA3－F2グリッドに単独で位置する溝跡である。地形的には東向き斜面に面した痩せ尾根の肩部に立地している。平面形は，黄色味が強いLⅦで検出された。本遺構は東側が流失しているため遺存が悪く，わずか2.5mが検出されたに過ぎない。幅は77cmを測り，斜面上位の南部で若干の周壁の崩れが観察される。底面は丸みをもって立ち上がり，地形に沿って東側に傾斜している。

以上，本遺構の残存状態から，その性格を推定することは困難である。また，遺物が出土していないため，遺構の年代も不明である。（佐藤）

第8節　焼土遺構

本遺跡から検出された焼土遺構は1基のみである。尾根の肩部に立地しており，他遺構とは異なる立地をとる。

1号焼土遺構　SG01（図145，写真80・112）

本遺構は，調査区南東部のA3－J2グリッドに位置する。周辺は尾根頂部から派生する東向き斜面の肩部にあたり，本遺跡のなかでは特異な立地をしている。遺構検出面はLⅦである。SK40と重複し，明確な新旧関係は明らかにできなかったが，堆積土や平面形から本遺構が新しいと考えられる。

本遺構は，酸化面とその下部の掘形から構成される。酸化面は掘形の西端に認められ，規模は径25×12cm，厚さ5cmを測る。掘形は東西方向に長軸を指す楕円形を呈する，土坑状の下部構造である。規模は1.17×0.60mを測る。掘形内堆積土は2層に細分された。混入物は少ないが，遺構の状況を考えれば，人為的に埋め戻されている可能性が高い。

遺物は，掘形ℓ2から縄文土器5点が出土した。ただし，本遺構より古いSK40が弥生時代の所産とみられるため，これらの遺物は本遺構の年代決定資料とはいえない。いずれも胎土に明瞭な繊維混和痕が観察できる。縄文時代前期中葉の土器片である。2・3は，半截竹管状工具により文様が施文される大木2a式土器である。文様は，2がコンパス文，3が櫛歯状工具による直線的な押引文が重層施文されている。1は単節斜縄文が施文されるのみの小破片であるが，器面・胎土の特徴から2・3と同時期として矛盾はない。

本遺構は掘形をもつ焼土遺構で，構築地点と重複関係から，弥生時代の所産と推定される。近接して，該期の土坑群が集中していることから，削平された調査区外に，該期の住居跡を想定することもできる。（佐藤）

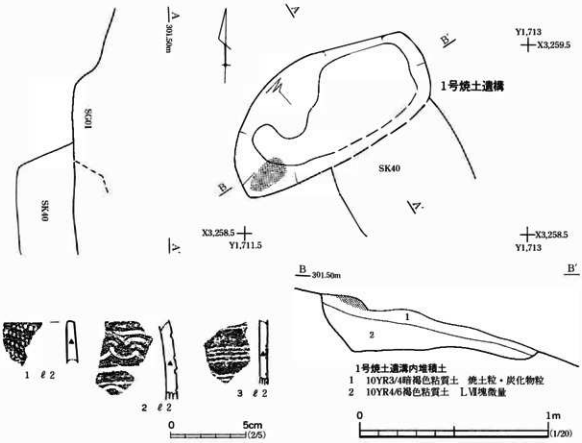


図145　1号焼土遺構，出土遺物

第9節　集　石　遺　構

本遺跡では1基のみの検出である。性格を示す所見は得られていないが，こうした遺構の報告例や出土遺物に石皿がみられる点から，縄文時代ないし弥生時代の所産と推定される。

1号集石遺構　SS01（図146，写真83・113）

調査区の西部A2－F・G4グリッドに所在する。地形的には南西部の谷底に位置する。検出面はLV上面である。礫の集中箇所を半截した結果，礫の下部には掘形らしきくぼみを有しており，礫中に石皿1点，剥片1点が含まれていたことから，集石遺構として報告する。

掘形内には径5～60cmの礫が87個入れられていた。礫にはすすの付着および被熱の痕跡はうかがえない。礫の石質は鑑定の結果，縞状片麻岩，ペグマタイト，石英斑岩など阿武隈山地西縁で産出する岩石や輝石安山岩，流紋岩など近隣の段丘堆積物中に見られる石材が大半を占めている。掘形はLVに近似するが，締まりのない黒褐色土によって埋められている。掘形の形状は不整形で，壁の立ち上がりも不明瞭である。また，谷底のため，遺構が掘り込まれるLV・Ⅵには水成堆積による多量の礫を含んでいる。本遺構構成礫との見極めは難しく，部分によっては遺構の下部に存在し

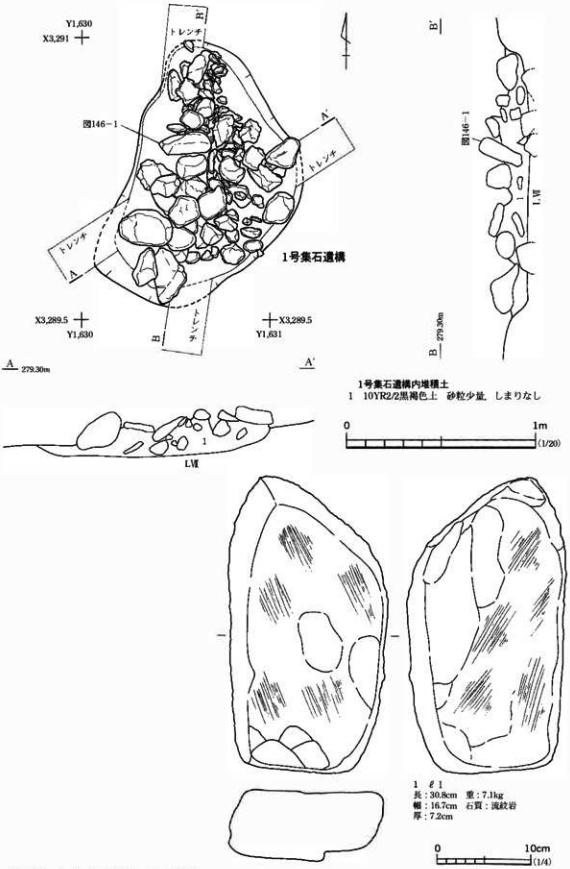


図146　１号集石遺構，出土遺物

ていた礫を誤認している可能性もある。

遺物は上記した2点のみで，その他には出土していない。その内，石皿を図示している。流紋岩の偏平礫を素材とし，表裏の平坦面上に研磨痕が残される。

遺構としては非常に不確定なものであり，通常検出される縄文時代の「炉」としての集石遺構とは異なる性格をもっているものと考えている。　（山　元）

第10節　遺構外出土遺物（図147～163，写真114～135）

出土状況（図147）

遺構外から出土した遺物は，縄文・弥生土器2,069点，土師器11,589点，須恵器202点，陶磁器8点，石器89点，石製品1点，金属製品1点，銭貨8点を数え，この内，本遺跡を特徴づけると考えられる遺物を，図148～163に図示した。遺物の詳述は次項にゆずり，ここでは，種別における特徴的な出土傾向を中心に述べることとする。なお，縄文土器と弥生土器，古墳時代の土師器と古代の土師器は，破片の大きさや遺存状態によっては識別が困難な場合があり，まとめて集計している。そして，出土傾向がうかがえるものは，その様度記述していく。

出土点数と層位（図147－●・●）

出土点数を種別ごとにグラフ化したのが図147－●である。一見すれば明らかなように土師器・須恵器の割合が極めて高く84%を占め，ついで縄文・弥生土器が続き，これらで，全体の99%を占めている。これは，本遺跡が古墳時代と平安時代の集落跡であるのとともに，特に，土師器では小破片に割れてしまうことを反映しているようである。

層位的には，ほとんどの層で古墳時代の土器が主体を占め，特に，ⅣLの出土量は突出している。これに対し，ⅤLで土師器の出土量は多いが，いずれもその上面付近からの出土であった。ⅤL中からの出土点数は少なく，ⅥLにいたっては皆無である。したがって，ⅣLが土師器・須恵器の，ⅤLが縄文・弥生土器の包含層と考えられる。

種別と出土傾向（図147－●）

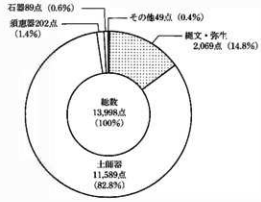
英木内遺跡では，特定の時期の遺物が集中して出土する傾向がみられた。ここでは，遺構との関連や出土層位も含めた出土状況を述べていく。

縄文土器：調査区南部の尾根頂部から東斜面の谷部にかけて出土している。層位的にはⅡ～Ⅵ上面までみられるが，谷部ではⅤLを中心にⅥL上面まで出土する。

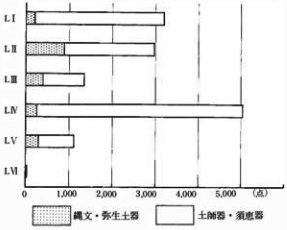
弥生土器：縄文土器と同様の分布をし，その他，西斜面の谷部にも小規模なまとまりが確認されている。調査区東部の谷ではⅣL以上から出土するので，該期の土坑が検出された尾根頂部から再堆積したことは想像に難くない。また，西斜面谷部では，ⅤL上部から出土しており，ⅤLの堆積時期を推定する有効な資料になりそうである。

古墳時代の土師器・須恵器：調査区中央から西部にかけて極めて多量の遺物が出土し，中には1

①種別出土点数



②層位別出土点数



③グリッド別出土点数

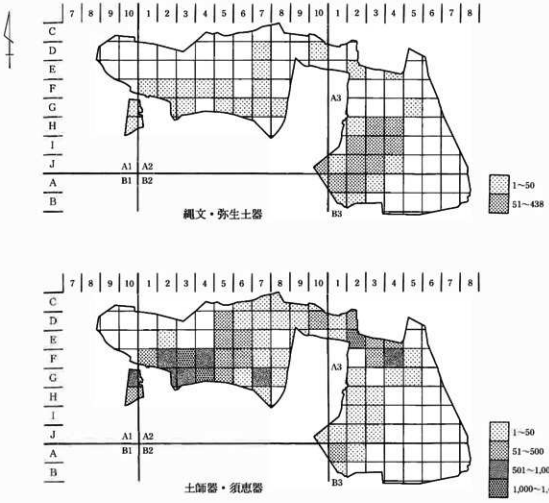


図147　遺構外遺物出土状況

グリッドから1,000点を超える出土もあった。西斜面には該期の各種遺構が検出されており，いずれも床面が流失しているので，遺物の多くは再堆積したものと考えられる。この他，完形率が高く，その場に置かれたような状態で出土した例もあり，特別な行為を推定するのも可能である。類例として，西白河郡矢吹町白山E遺跡，郡山市正直A遺跡などを挙げることができる。

平安時代の土師器・須恵器：特に，調査区中央から東斜面の北部にかけてのLⅣから多量出土した。周辺は遺構の密集域となっており，同一地点に重複する例もあった。遺物は，これらの構築時における排土中の遺物も含まれていると推測される。　（佐藤）

縄文土器（図148～154－1～3・35～38，写真117～127）

遺構外出土の縄文土器は，大まかな時期を群として分類し，記述する。点数の多い前期中葉・後葉についてはⅡ群・Ⅲ群と独立させ，Ⅱ群はさらに文様別に小分類を行っている。点数的に僅少な，その前後の時期については一括して一群とし，型式ごとに一類として扱った。

縄文土器Ⅰ群　早期から前期前葉の土器

1類（図148－1～4）　早期中葉の常世1式を本類とした。全て口縁部資料である。2～4の口端部には刻みが加えられる。1・2は貝殻腹縁圧痕を縦に配して口縁部文様帯を構成する。3は端部直下の棒状工具による刺突から平行沈線を垂下させる。4は無文である。

2類（図148－5・6）　早期後葉から末葉に属するものである。いずれも胎土へ繊維が混入されている。5は表裏に条痕が認められ，破片の上端には櫛歯状工具による刺突が見られる。6は地文縄文に向かい合わせの弧線が平行沈線によって描かれる。早期末葉に位置づけられる。

3類（図148－7）　前期前葉に属するものである。胎土へ繊維が混入されている。図148－7は上位の無文部に平行沈線，爪形刺突が見られる。下位の地文は重層するループ文の下部に無節の縄文が認められる。

縄文土器Ⅱ群　前期中葉の土器（大木2a式併行）

1類（図148－20・21）　半截竹管状工具によってコンパス文を描くものである。口縁部が波状を呈する。20は口唇直下にコンパス文を描き，その下位に短冊状の曲線文を配し，その下位にもコンパス文が施文されている。波頂部には同様な曲線文を用いて縦区画が入れられる。

2類（図148－11・22～30，図149，図150－3～7・9～18）　平行沈線，押引文，コンパス文または波状文を多段に施文するものである。胎土に明らかな繊維混和痕が観察される。内面の調整は丁寧に行われ，いずれも平滑に仕上げられている。施文工具や各文様の組み合わせによってさらに細分した。

a種（図148－11・22～30，図149－1～4・6・10～16・19～21・23～26・30）：櫛歯状工具による押引文・コンパス文を重層的に配するものである。施文具は3・4本を1単位とする櫛歯状工具である。押引文は有節沈線となるものが多い。口縁部は波状を呈するものが多く，波頂部で縦帯が垂下するもの（図148－25）や，口唇部内面に深い沈線を1条刻むもの（図148－22）もある。また，平

縁でも突起がつく例（図149－26）がみられる。頸部は若干くびれるもの（図149－4）と，強く屈曲するもの（図149－6）があり，頸部以下の地文に網目状か葺瓦状の撚糸文が施される。また，文様帯内には通常地文は施されないが，図148－11は側面還付縄文，図149－11には無節縄文が施文される。

b種（図149－5・17・31，図150－16）：櫛歯状工具による押引文と波状文を重層的に配するもので，a種のコンパス文が波状文に置き換わったものである。

c種（図149－18・22・27～29・32～34，図150－3～7・9～15・17）：押引文もしくは平行沈線のみ施文されるものである。施文具はa・c種と同様のものが多いが，半截竹管による押引文を2条並べるもの（図150－7）もある。器形はa種同様口縁部には波状口縁が見られ（図150－9・12），頸部はくびれる（図149－18，図150－3）。また，底部資料（図150－5・6）を見るに，胴部下端まで文様帯が続く個体もあることが分かる。

d種（図149－7～9，図150－18）：半截竹管状工具によるコンパス文もしくは波状文を多段に配するものである。口縁直下から1cm程度の間隔で横位に配している。図149－7・8は同一個体の波頂部である。

3類（図148－17～19，図150－8，図152－10～16・18・19）　口唇直下に半截竹管状工具もしくはそれに準じた工具により押し引き・刺突文が施され，文様帯を構成するもの。

a種（図150－8，図152－12～14・16）：口唇直下に鍔状の隆帯を貼り付け，押し引きおよび刺突文を沿わせるものである。図152－12～14は同一個体で，口縁は波状を呈し，隆帯以下に単節縄文が施文される。無文となった口縁部には篦状工具による押し引きがなされる。図152－16も同様に口縁直下に隆帯が貼り付けられ，その上下に半截竹管による刺突が加えられる。隆帯下部には地文縄文も施されている。図150－8は内湾する口縁部で，口唇部直下に隆帯が剥落した痕跡が残され，それに沿って爪形刺突が加えられる。地文には縦位の羽状縄文が施される。

b種（図148－17，図152－10・11・15・18・19）：口唇直下に半截竹管によって押引文が施されるものである。図152－10・11・18・19は口唇下を無文とし，2条の押引文を施す。押引文下には地文である単節縄文が施される。図152－15は無文帯がなく，地文上に押引文が1条横走する。図148－17は波頂部下に円形の貼付文が施される。押し引きは多くが「凹」字状を呈するが，図152－10・11のみ爪形文となる。

c種（図148－18・19）：口唇直下に棒状工具などで刺突が加えられ，狭い文様帯を構成するものである。胎土に繊維が混入されているのが明瞭に観察できる。図148－18は無地の口縁部が内側に屈曲し，3本同時施文具による刺突が加えられる。図148－19は口唇直下に棒状工具による刺突が1列加えられる。

4類（図150－1・2，図152－20～27）　口縁部文様帯に曲線的な意匠が描かれるものである。工具によって細分した。文様帯内には縄文は施されない。

a種（図152－20～27）：先割れの篦状工具により押引文が施されるものである。図152－20～26は

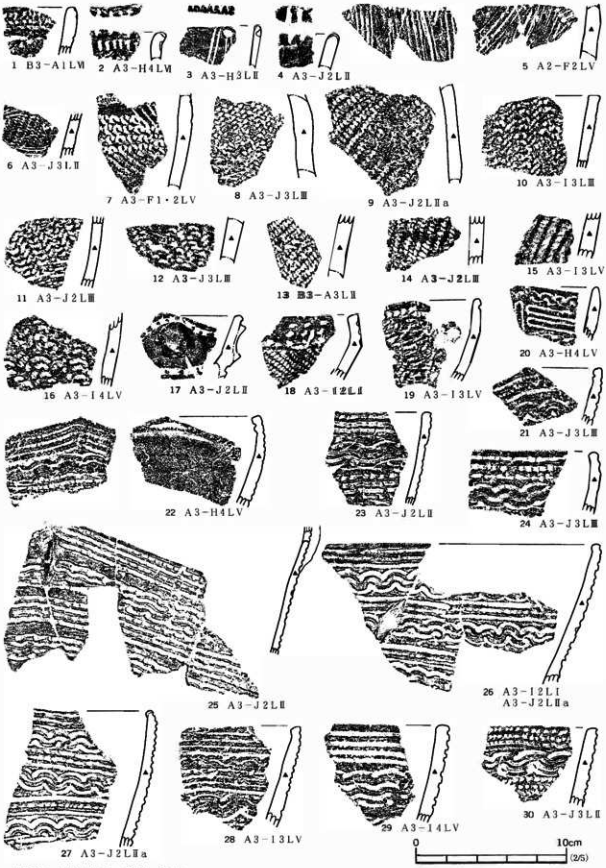


図148　遺構外出土遺物（1）

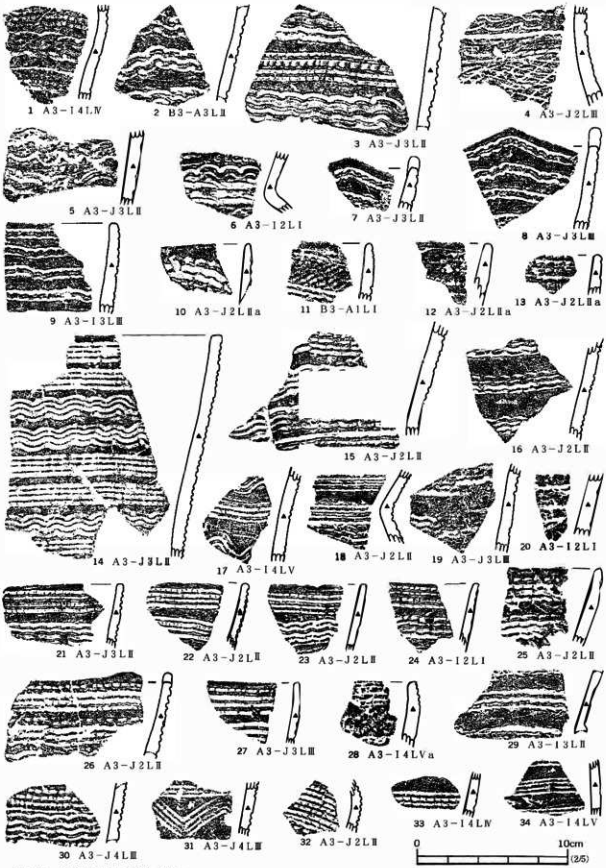


図149　遺構外出土遺物（2）

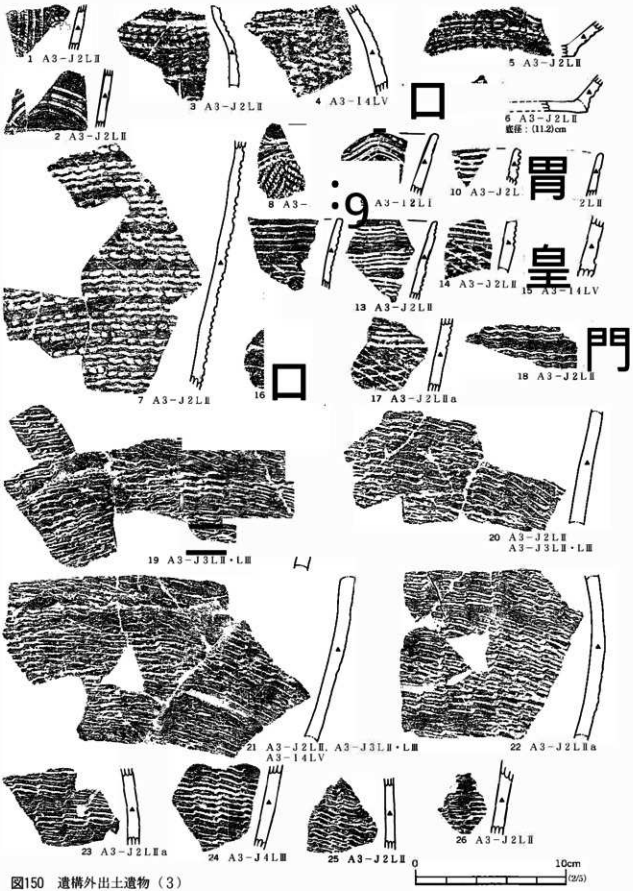


図150　遺構外出土遺物（3）

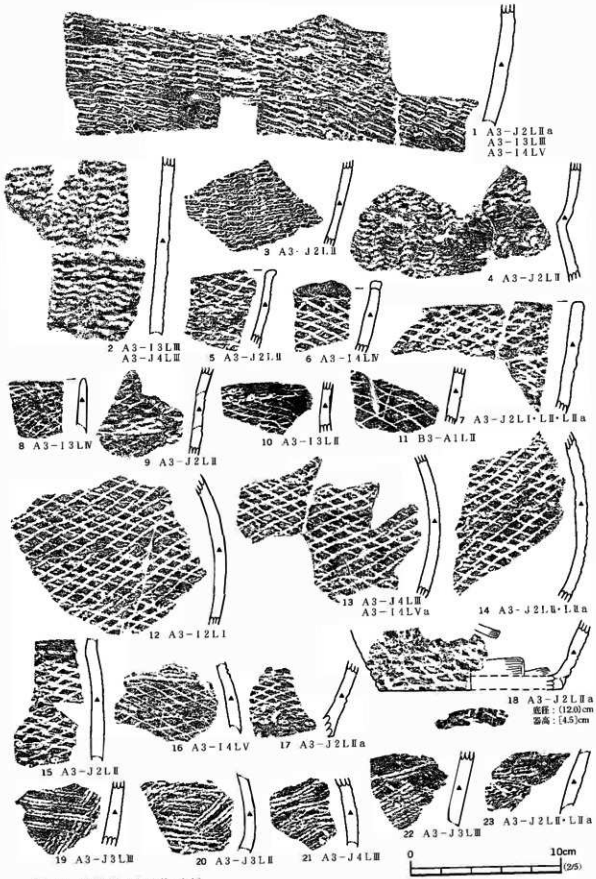


図151　遺構外出土遺物（4）

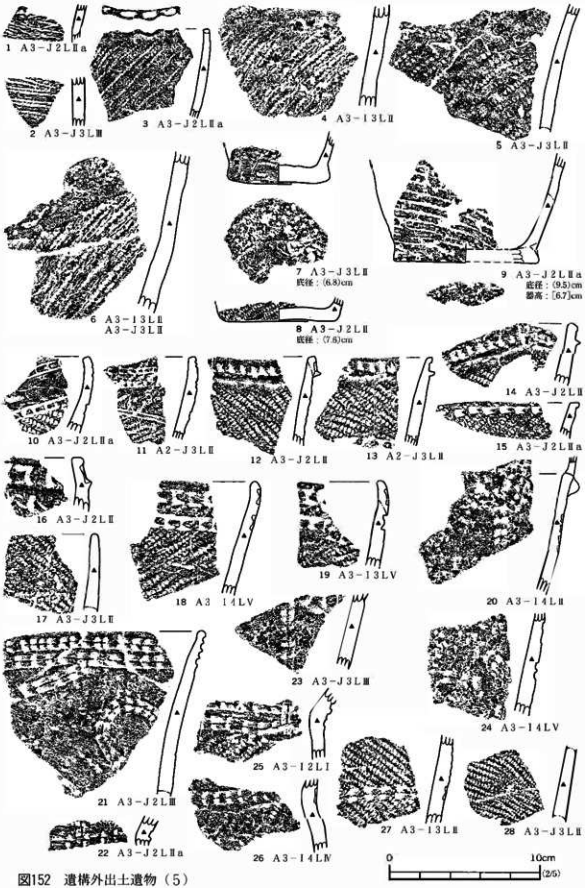


図152　遺構外出土遺物（5）

同一個体で，無地の口縁部には横走する2条の押引文により文様帯を区画する。文様帯には数箇所に縦区画が施され，菱形を呈する意匠の内部に渦巻状の文様を配する。20を見る限りでは，波頂部には粘土瘤が貼り付けられる。若干括れる頸部以下には単節縄文が施される。27は胴部破片で，同様の工具を用いた押引文が横走する。

b種（図150－1・2）：櫛歯状工具による押引文によって描くもの。同一個体の破片で，4本同時引きの櫛歯状工具によって，波状もしくは連弧状のモチーフを描いている。

5類（図148－8～10・12～16，図150－19～26，図151，図152－1～9・17・28，図153－25・27）

地文のみ確認されるものを一括した。ここには器面全体が地文の土器も含まれるが，2・3類の胴部破片も含まれるものと思われる。

a種（図150－19～26，図151－1～4）：葺瓦状撚糸文が施されるものである。口縁部破片は認められなかったが，頸部（図151－4）を見る限り，屈曲した上半にも撚糸施文されており，器面全体に施文されるものもあったと思われる。胴部には膨らみを持つものが多いようである。なお，図150－19～22は同一個体破片である。

b種（図151－5～18）：網目状撚糸文が施されるものである。口縁部資料が存在し，波状口縁も認められる（図151－5・6）。頸部資料（図151－15）は軽く屈曲し，上部は無文であることから口縁部に2類の文様帯を持っていたと思われる。胴部は膨らみを持ったものが多いようである。なお，図151－18の底部には編物かと思われる圧痕が残される。

c種（図151－19～23，図152－1～3・6・9）：撚糸文施文のものである。胎土に繊維混和痕が明瞭に見られる。内面の調整は精緻で，礫の混入も少ないなどの特徴が，a・b種の胎土に類似することから本類に含めた。基本的に斜位もしくは横位に撚糸文が施されるが，菱形に配したもの（図151－19・20）もある。図152－3は口唇部を指頭によって小波状にくぼませている。図152－9は底部破片で整形時に胴部から底部に向けて粘土を寄せてすり合せた痕跡が見て取れる。

d種（図148－8～10・12～16，図152－4・5・7・8・17・28，図153－25・27）：縄文施文のものである。c種同様，胎土から本類に属すると判断した。多くは単節縄文だが，その他に付加条（図152－4），側面環付（図148－10・12・16），組紐（図148－8），無節（図148－15）なども認められる。

縄文土器Ⅲ群　前期後葉～末葉の土器

1類（図153－1～17・23・24・30）　浮島式に比定されるものを一括した。図153－1～4・6～8・10・11は，口縁部に変形爪形文を2条巡らせ，その下位に平行沈線による鋸歯状文もしくは菱形文を描く。1～4・6および図153－8・10・11はそれぞれ同一個体で口唇部には刻みが入れられる。図153－30は波状を呈する口縁部破片で，口唇部には刻みが加えられる。沈線により口縁に沿って三角形を描く。同図5は刻みのつく隆帯で区画された上部に，沈線を横走させる。13・17は頸部の区画に爪形文が用いられ，その上部には菱形か鋸歯状を呈すであろう平行沈線が施される。この2点に関しては2類に含まれる可能性もある。12・14～16は貝殻腹縁のロッキングにより波状

文を描いている。9は口縁部まで地文縄文が施され，口唇部には棒状工具押し付けによる圧痕が残る。以上は浮島Ⅱ式で，1～4・6が古様を，10・11が新様を示している。図153－23・24は平行沈線に刺突を沿わせるもので，施文工具幅は3mmと狭い。モチーフは弧線もしくは鋸歯状を呈する。新しい文様要素であり，浮島Ⅲ式に比定される。

2類（図153－18・19）　諸磯b式に比定されるものを一括した。図153－18・19は爪形文を用いるものである。描かれているモチーフは渦巻もしくは蕨手状をモチーフとした入組文が展開するようである。諸磯b式でも古段階に位置づけられる。

3類（図153－20）　大木6式に比定されるものである。図153－20は内湾する口縁部で，細い粘土紐を上下に2条貼付して区画した内側に，同様の貼付により横位に連続する菱形文を描く。

4類（図153－21・22・26・28・31）　地文縄文のみ確認できるものを一括した。胎土に繊維混和痕が認められず，口唇部が四角く収められる特徴などから本群に含めた。図示したのは口縁部で，全て外反する。図153－31は波状口縁の波頂部で，口唇には円形竹管による刺突を施す。同図21は器面は無文だが，口唇に縄圧痕が認められる。それ以外は単節縄文が施されている。

縄文土器Ⅳ群　中期以降の土器

1類（図153－29）　中期末葉に比定されるものである。内湾する口縁で，微隆起線を一巡させ，口縁部は無文帯となる。

2類（図153－32・33，図154－1）　後期に帰属するものを一括した。図153－32は直立する口縁部の内面に沈線が1条巡らされる。同図33は沈線と磨消縄文により曲線の文様を描く。以上は若干の時間差はあるが，おおむね後期前葉に属するものと思われる。図154－1は注口土器の口縁から胴部上半までの資料である。文様は施文されていないが，丁寧な磨きが観察できる。高さのある内湾気味の口縁部から括れて，丸みを持った肩部に至る器形を持つ。注口部は欠落するが，根元に粘土貼付を施して1段隆起させている。後期中葉の加曽利B式期に属するものだろう。

3類（図154－2・3・35～38）　晩期に比定される資料を一括した。図154－2は下部を横走する沈線によって区画される文様帯に，3条の沈線を組み合わせた三角形状の陰刻文が認められる。雲形文の一部をなすものかとも思われ，大洞C2式と考える。同図3・35～38は粗製の深鉢である。器面には網目状撚糸文（35・36・38），条痕文（3・37）が認められる。

弥生土器（図154－4～34，図155－1～19，写真128～131）

図154－8～10・12・14・17，図155－13は中期中葉の南御山Ⅱ式の直前段階に位置付けられるものである。図154－8・12，図155－13は壺，それ以外は鉢かと思われる。単沈線によって区画された縄文帯・無文帯を用いて文様を描く。縄文の代わりに藤縄文（図154－10）や条線文（図154－17）を用いたものも見られ，図154－12の無文部には赤色塗彩が認められる。描かれるモチーフは方形・三角形を基調とする。図155－13は壺の口縁部で，複合口縁上に縄文が施される。

図154－4・5・11・16・18・20～34，図155－1・9・10・12・14・15・19は中期後葉の川原町

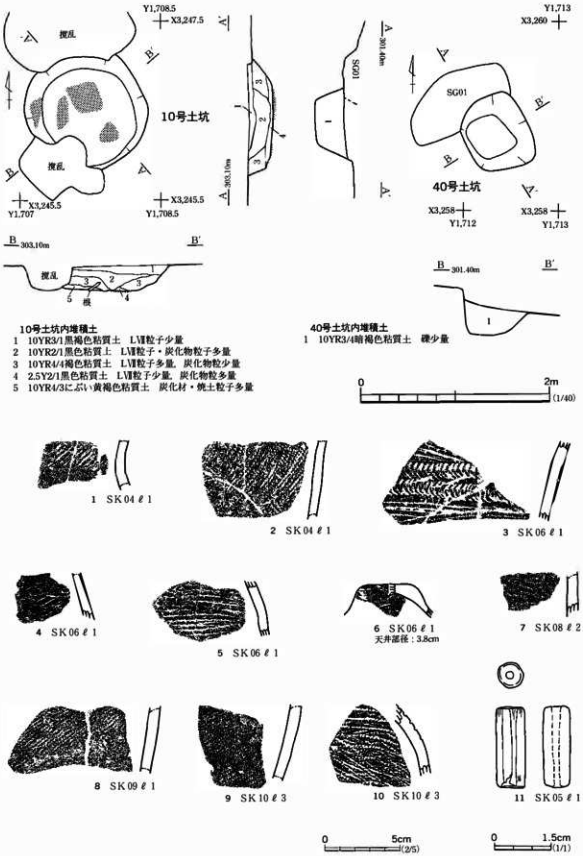


図123　Ⅱ類土坑（2）　10・40号土坑，出土遺物

突すれば，形状の整ったSK05・08については墓坑の可能性が高いものと考えている。

SK10に関しては，壁面・底面に酸化面を有していることから，何かの焼成に用いられたことは明らかであり，本類中でも特殊なものである。Ⅵ類土坑ないしⅦ類土坑に含めるべきかもしれないが，形状や出土遺物さらに分布状況から本類に含めた。

本類は，SK05から管玉が出土していることから弥生時代の墓坑かと思われるが，掘り込みが浅く，形態に規格性が感じられないことから，全てが墓坑であるとは言い難い。本類中には墓坑が含まれている可能性もあることだけを指摘するにとどめたい。

遺　物（図123，写真111・112）

遺物は土器10点および管玉1点を図示している。土器はSK06出土の縄文土器（図123－3）を除いて全て弥生土器である。1・2・4・5・7～10は甕ないし壺の胴部破片である。いずれも地文のみ観察され，2・7～9には縄文が，1・4・5・10には直前段多条の縄文が施される。6は蓋である。遺存部に文様はみられない。以上はおおむね弥生時代中期後半に位置づけられよう。

3は縄文時代前期後葉の資料で，変形爪形文を水平に2条施し，その周囲に平行沈線が認められる。浮島Ⅱ式に比定されよう。周辺には同一個体や該期の土器が集中しているので，これらが土坑の掘削・埋め戻しに伴って混入したと考えられる。11は碧玉製の管玉でSK05の検出面から出土した。底面からは浮いている。中心には径2㎜ほどの孔が貫通しているが，穿孔部は中央でなく，若干端に偏在している。穿孔は両端から行われており，X線写真撮影により，孔のずれが明らかにされている。

Ⅲ類土坑　（SK24）

遺　構（図124，写真77）

古墳時代の土坑で，SK24のみが本類に含まれる。調査区西部斜面中位にあるSK24は，平面形が不整形で，アメーバ状を呈する。斜面下方に当たる西壁は流出し，南部は調査区外へ出ているため正確な規模は不明だが，遺存値で東西3m，南北3.3mを測る。掘り込みは浅く，遺存度の高い東壁で20㎝程度しかない。底面は礫を含むLⅦに達しているため，凹凸がみられる。遺構北部の底面からは，小規模な焼面が検出された。大きさや酸化状態は貧弱で，カマドや炉跡とは考えにくい。底面の状況も踏まえれば，居住には適さないと考えられ，住居跡の可能性は低い。

遺構内堆積土は東壁際に三角形状に！2が堆積し，その上に掘り込み全面を覆い隠すように！1が堆積している。！1は炭化物・焼土を多量含み，人為的な土の投げ込みが想定される。！2はその堆積状況から，自然堆積の可能性が高い。また，！1からは完形個体を含む土師器片が多量に出土する一方，！2からの遺物の出土はない。

以上のことから，埋没途上の土坑に意図的な埋め戻しおよび土器の廃棄行為が行われているものと判断した。ただ，！2の状況から，廃棄行為のために掘られたものではないようで，土坑自体の機能は不明である。廃棄された土器の年代観から，5世紀末葉に機能していたものと推測される。

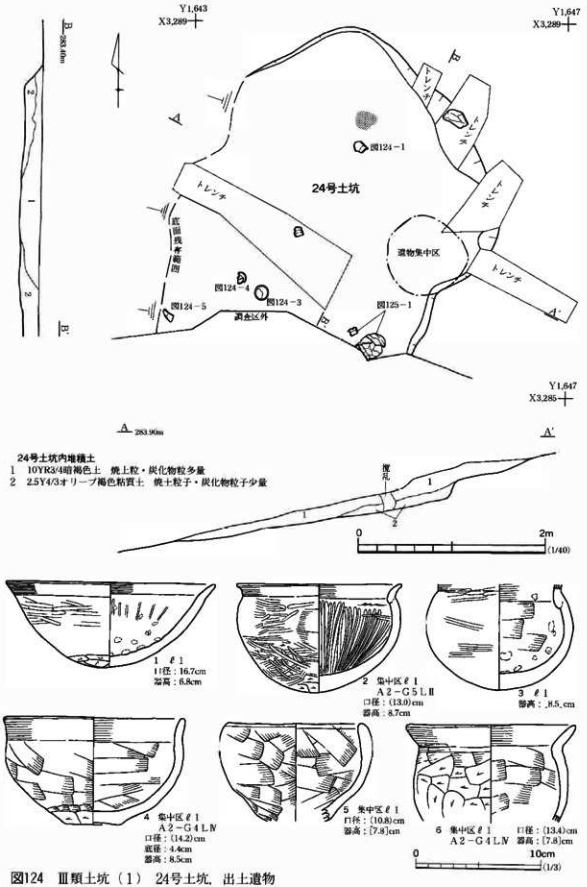


図124　Ⅲ類土坑（1）　24号土坑，出土遺物

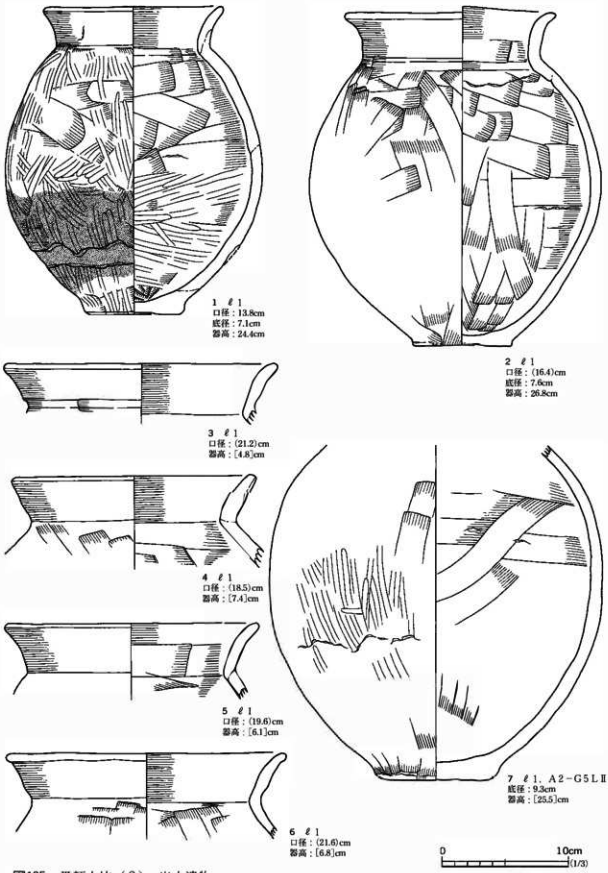


図125　Ⅲ類土坑（2）　出土遺物

遺　　物（図124・125，写真108・109）

ＳＫ24から，径復元可能な個体13点を含む477点の土師器が出土した。すべて１１から出土し，つぶれたような状態であった。その内，13点を図示した。杯（図124－１・２）は丸底で，未発達な口縁部が開く器形である。１は体部が浅く，括れは弱い。２は体部が深く，括れが強い。鉢にはバリエーションがあり，丸底で，口縁が直立するもの（同図３），平底で口縁部が外反するもの（同図４），内湾するもの（同図５）がある。甕は胴部が卵形もしくは倒卵形を呈し，口縁部形態は，立ち気味のもの（図125－１・２・５）と「く」字状に屈曲して肥厚するもの（同図３・４・６）が認められる。また，胴部にヘラミガキ調整が加えられるもの（同図１・７）も認められる。

Ⅳ類土坑　（ＳＫ02・16・22・23・27・30・33～35・43・44）

遺　　構（図126～128，写真70・73・75・76・78～80）

古代に比定される土坑の内，遺物の質・量から廃棄土坑と推測されるものである。ＳＫ02・16・22・23・27・30・33・34・35・43・44の11基が本類に該当する。本類の判断にあたり，堆積土に焼土・炭化物・ＬⅦなどが多量含まれ，堆積状況が人為的であると思われるもの，または，遺物の遺存度が高い，もしくは量的に多い，などの点を基準とした。

平面形には，楕円形（ＳＫ02・16・22），長方形（ＳＫ27），不整円形があり，規格性はさほど認められない。不整円形のものでは，相対的に大型の土坑（ＳＫ30・35・43・44）と小型の土坑（ＳＫ23・33・34・36・38）に分けられ，深さも前者が深い傾向がみられる。規模も１ｍ弱～２ｍ強とまちまちであるが，楕円形・長方形のものが大きいようである。分布状況はＳＫ23を除いて，全て調査区東部に位置する。特に，ＳＫ27・30・33～35・43・44のように，住居跡・建物跡の集中する付近もしくは重複する位置に所在することが多いといえる。

調査区東部のⅣ類土坑出土遺物は９世紀の範疇に収まるもので，概ね後葉～末葉に位置づけられる。住居跡群の出土遺物とそれほど相違なく，これらの住居跡と同時期に機能していたと思われる。その性格は，住居に付帯するゴミ穴と推定される。なお，調査区西部のＳＫ23は，遺物から見て９世紀中葉から後葉に位置づけられ，東部検出の土坑よりも若干古いかと思われる。

遺　　物（図129・130，写真108・110・113・136）

図129に土師器12点，図130に石器１点，土製紡錘車１点を図示した。

杯はいずれもロクロ整形で，図129－12を除いて内面黒色処理がなされている。内面黒色処理されるものは回転糸切りされるものが大半を占め，わずかに静止糸切りされたものが混じる。器形は小さめの底部から開き気味に立ち上がり，口縁部が外反する浅い杯が多い。

特に，切り離し後，回転ヘラケズリが体部下端に行われ，底面も再調整されるもの（図129－６・９～11）が多く，ＳＫ33・43・44から出土している。ＳＫ33では口縁端部が摘み上げられる長胴甕（図129－７）が出土しており，これらの土坑は土器の編年観から９世紀後半に位置づけてもよいかと思われる。手持ちヘラケズリ調整はＳＫ02出土杯（図129－１）に認められる。この他，

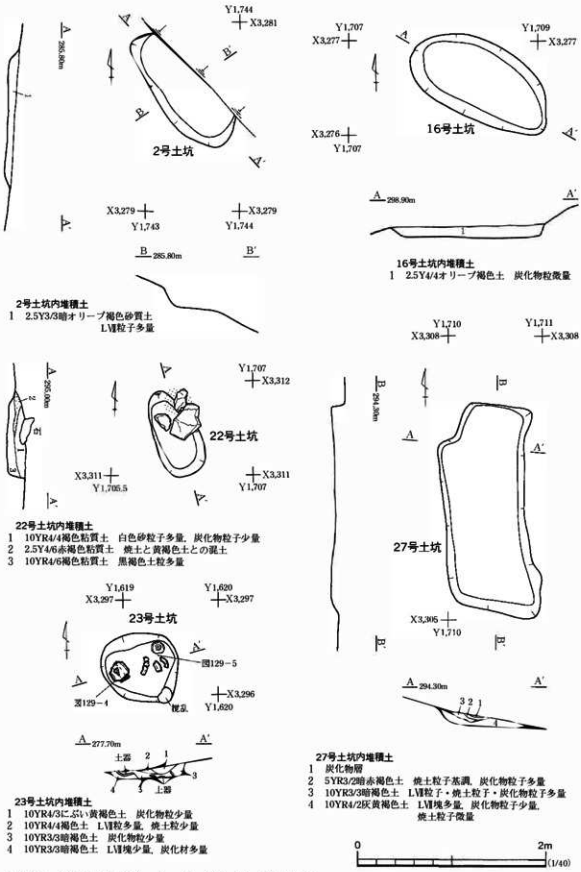


図126　Ⅳ類土坑（1）　2・16・22・23・27号土坑

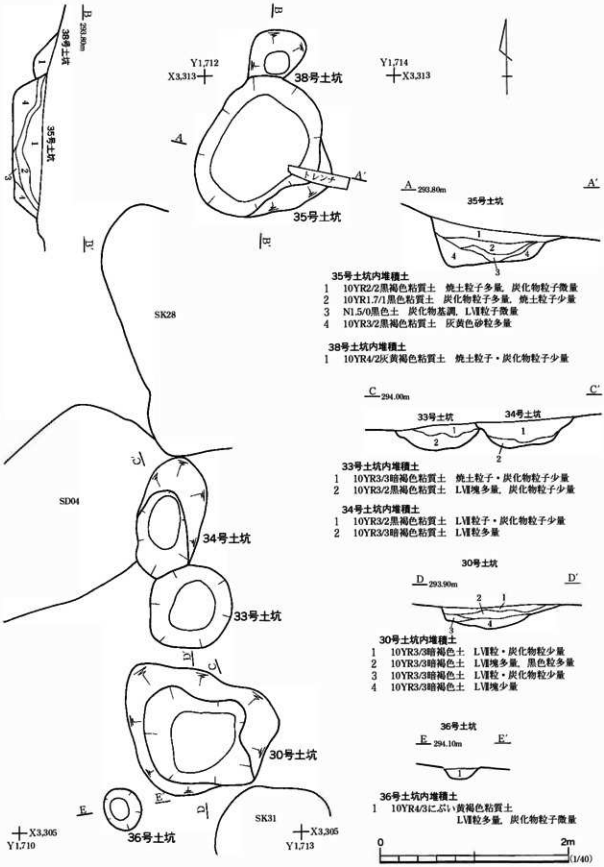


図127　Ⅳ類土坑（２）　30・33～35号土坑，Ⅸ類土坑　36・38号土坑

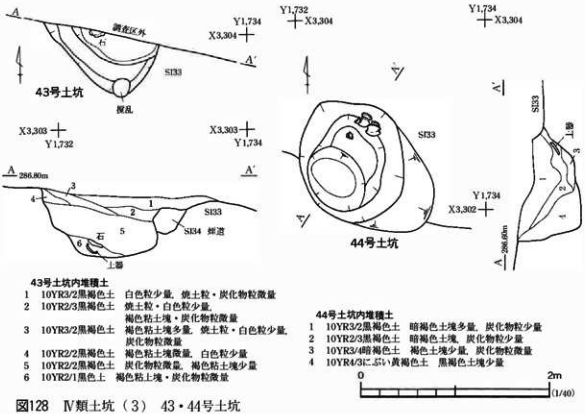


図128　Ⅳ類土坑（3）　43・44号土坑

ＳＫ43から出土した杯には，ＳＩ29で認識された，体部下端のナデ気味の調整が観察される（図129－８）。ＳＫ02からは切り離し後無調整のもの（図129－２）も出土しており，土器の変遷観から見て，９世紀末葉～10世紀前葉に位置づけられる。

ＳＫ23出土杯（図129－５）は，器形が全体的に大振りで，大きめの底部から丸みを帯びて立ち上がる。体部下端のみ回転ヘラケズリが施される。底面には回転糸切り痕を明瞭に残している。これに伴って土師器甕（図129－４）が出土している。器高の低い甕で，口縁部が肥厚しながら「く」字状に屈曲する器形を呈する。体部調整は，下半にのみケズリが施されている。これらの年代は，杯の特徴から判断すれば９世紀中葉まで遡るかもしれない。

ＳＫ44出土の図129－12に関しては静止糸切りによって切り離され，体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整がなされるものの，内面は未調整のままである。また，内面は黒色処理されていない。器形などは古い様相を残しているが，９世紀後葉でも若干新しい年代の可能性もある。また，ＳＫ44出土の図129－11には墨書が認められ，「大田」と判読できる。

その他に非ロクロ整形甕（図129－３）がＳＫ16から出土している。体部の器形が球状に張り出すタイプのもので，口縁部は遺存していない。調整はヘラナデの後ヘラケズリされている。砥石（図130－１）はＳＫ44から出土したものである。研磨面は１面で凹面を呈する。在地系の石材である輝石安山岩を素材としている。

土製紡錘車（図130－２）はＳＫ15から出土したことになっているが，精査開始時に重複に気付かず掘り込んでいたため，本来的にはＳＫ16に含まれる遺物を誤って取り上げたものと考えてい

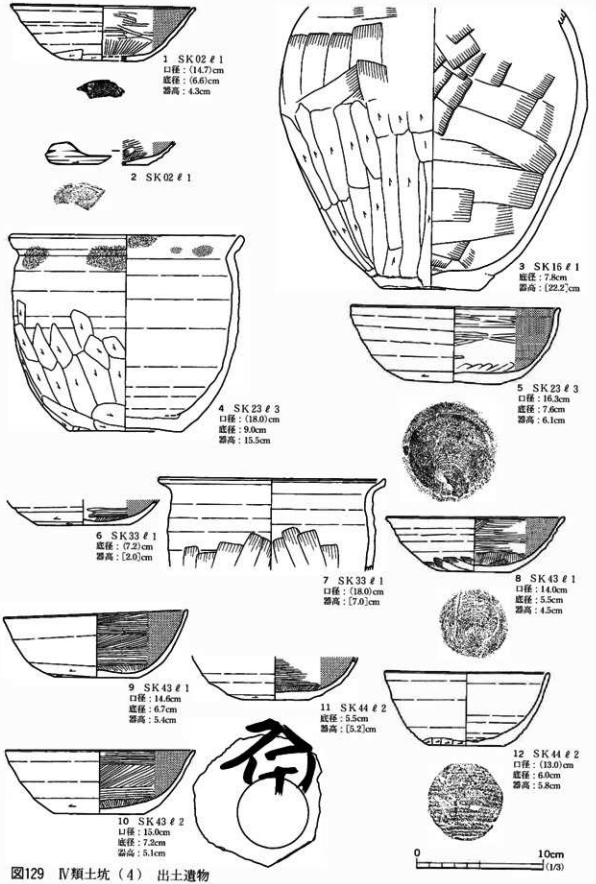


図129　Ⅳ類土坑（4）　出土遺物

る。表裏面および側面に幅狭の櫛歯状工具による調整が加えられる。表裏面は孔を中心に放射状に施した後に，孔の周りを渦巻状に巡らせる。側面は2条調整を加えているが，直線的でなく，場所によっては眼状を呈する。

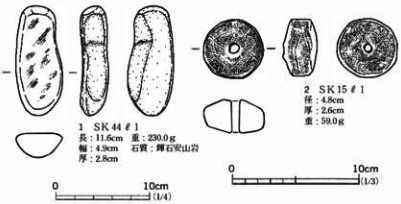


図130　Ⅳ類土坑（5）　出土遺物

Ⅴ類土坑　（SK11・12・14）

遺　構（図131・132，写真71）

古代の墓坑と思われるものを本類とした。SK11・12・14がこれに当たる。平面形は楕円形もしくは長方形を呈する。他類に比して規模が大きく，長径2m以上，短径1.5m程度を測る。いずれも長軸を等高線に平行させるように掘り込まれている。掘り込みは，斜面にある割には他類の土坑よりも相対的にしっかりとしており，深さは50cm以上を測る。これも本類土坑の特徴である。周壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，底面から周壁にかけての断面形は箱形を呈する。なお，斜面上位には周壁の崩落が顕著にみられる。

堆積土はⅦを多量含む，もしくは基調とする土で，人為的に埋め戻されたものと判断される。SK14ℓ5は遺構の西側のみに堆積し，その立ち上がりはかなり急峻に立ち上がっていることから，有機質を埋設する際の掘形埋土の可能性を考えている。ここに，有機質の腐食に伴い崩落した盛土の痕跡と推測されるℓ2～4が堆積する。このくぼみを覆うようにℓ1が堆積している。

本類土坑の分布状況は，調査区東部斜面に限られ，緩い尾根上に立地している。また，この尾根上に同時期の住居跡は構築されていない。

古代の墓坑と考えられる好例として，玉川村兎喰遺跡を挙げることができる。兎喰遺跡は，谷を挟んで本遺跡の東側に立地する遺跡で，楕円形の墓坑の他に，箱形を呈するものについても墓坑の可能性が指摘されている（山内1986）。出土遺物をみると，本遺跡例よりはやや古い様相を持っている。この他，玉川村辰巳城遺跡や矢吹町白山C遺跡などに類例がある。

遺　物（図131，写真108・112）

遺物はSK11・12の2点を図示した。1はSK11出土の土師器高台付杯である。整形はロクロによる。それ以外の調整は認められない。高足状の高台に直線的に開く皿状の杯部が乗る。杯部の切り離しは回転糸切りである。2はSK11とSK12の接合例である。非ロクロ整形の土師器甕で，口縁部は短く，屈曲の度合いは小さい。胴部にはヘラナデが認められる。杯を評価すれば，SK11の年代は10世紀前半と思われ，他の2基も大差ない時期とみられる。

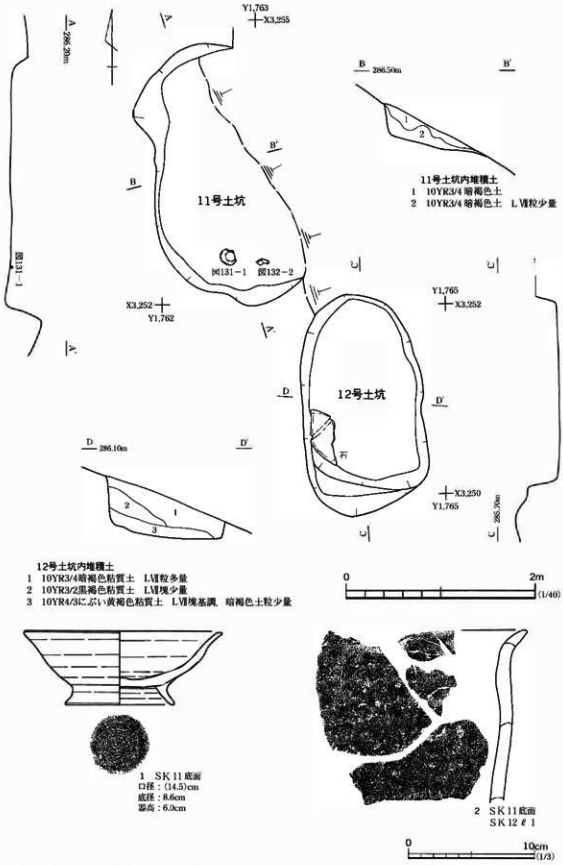


図131　Ⅴ類土坑（1）　11・12号土坑，出土遺物

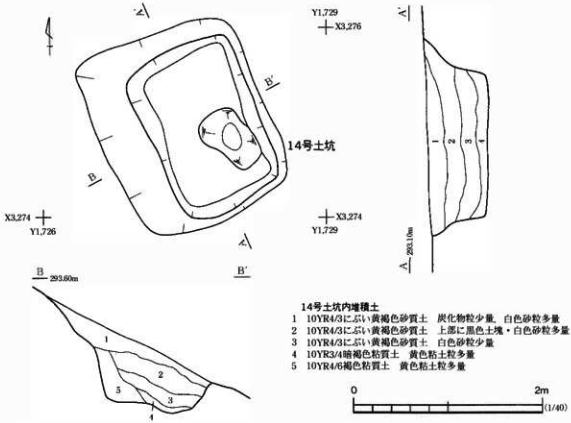


図132　Ⅴ類土坑（2）　14号土坑

Ⅵ類土坑　（ＳＫ13・21・29・37）

遺　　構（図133，写真71・75・78・79）

古代に属するとみられる，いわゆる木炭焼成遺構を一括した。これにはＳＫ13・21・29・37が該当する。平面形は不整楕円形を呈するもの（ＳＫ13・21）と長方形を呈するもの（ＳＫ29・37）がある。壁面には酸化面が認められ，底面付近には炭化物・炭化材を基調もしくは多量混入する土が堆積する。壁面の酸化面は，この炭化物層より上位に認められる場合が多い。

本類土坑の重複関係に注目すると，ＳＫ21が８世紀の住居跡に伴うと考えられるＳＤ03よりも新しく，ＳＫ13は10世紀の墓坑であるＳＫ11よりも古いことが分かる。したがって，構築時期は９～10世紀前半ぐらいと考えられ，その他の本類土坑も大差ないとみられる。ただし，ＳＫ13は分類上本類に含まれるが，検出面がＳＫ11の底面で，実際の掘り込みの規模はさらに大きく，深いことが想定される。炭化物の混入具合も他の３基とは異なっており，これらとは用途を異にする可能性もある。遺物はＳＫ13から土師器が出土しているが，細片のため図示していない。

Ⅶ類土坑　（ＳＫ28・31）

遺　　構（図134，写真78）

古代に属するとみられる土坑の内，底面に焼け面を有する土坑を本類とした。ＳＫ28・31がこれ

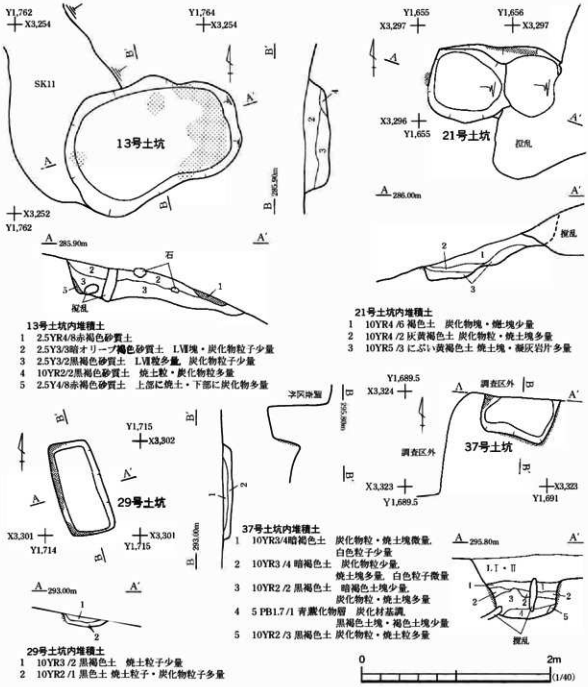


図133　Ⅵ類土坑　13・21・29・37号土坑

に該当する。いずれも調査区中央部の尾根鞍部から東部斜面への落ち際に位置しており，遺構内からは土師器が出土している。付近にはＳＩ29をはじめとする住居跡群やＳＫ30をはじめとするⅤ類土坑群など平安時代の遺構が集中して見られ，本類土坑も近い時期に比定される。具体的な機能・用途は不明である。

ＳＫ28は壁と底面中央に酸化面を持っている。平面形が隅丸方形と推定され，規模が2.8×1.4mと大型の土坑である。規模と底面付近に炭化物層をもたない点で，Ⅵ類土坑とは異なる。当初は住居跡の可能性も考えられたが，付属施設がなく，底面も傾斜がきついことから，居住施設には適さ

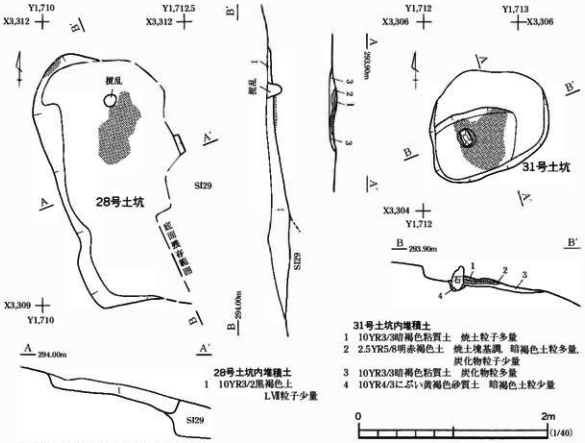


図134　Ⅶ類土坑　28・31号土坑

ないと判断している。ＳＩ29の西壁を一部壊しているので，10世紀以降という年代が与えられる。

ＳＫ31は掘形を有し，坑底中央に支脚状の石が埋設されている。削平あるいは土砂の流出のため，上部が遺存しない竪穴住居跡のカマドの痕跡であった可能性もある。

各遺構からは土師器が数点出土しているが，細片のため図化し得なかった。

Ⅶ類土坑　（ＳＫ17・20・25）

遺　　構（図135・136，写真73・75・76）

近世以降に属する土坑で，性格は様々なものが含まれる。ＳＫ17・20・25はそれぞれ鉄釘や寛永通寶が堆積土中から出土しており，いずれも調査区西部の谷部に位置している。

ＳＫ25は５×1.8mの長方形を呈する大型の土坑である。周壁に若干の崩れが認められるが，断面形が箱形の整った形態である。ピットが長辺沿いの底面に３個ずつ，壁面には東壁に２個，西壁に１個，北壁中央に１個と整然と配列されている。このことからＳＫ25には上屋の存在が窺える。以上の調査所見から，土坑の性格は，半地下式の「室」と推定される。また，堆積土下部には炭化した藁・籾と若干の炭化材を主体とする層が間層を挟みながら数層堆積し，その上には薄く酸化面が形成される。これは数度にわたって，掘り込み内において伏せ焼き状に火が焚かれた痕跡であり，湿気抜きの意図があったものと推測される。

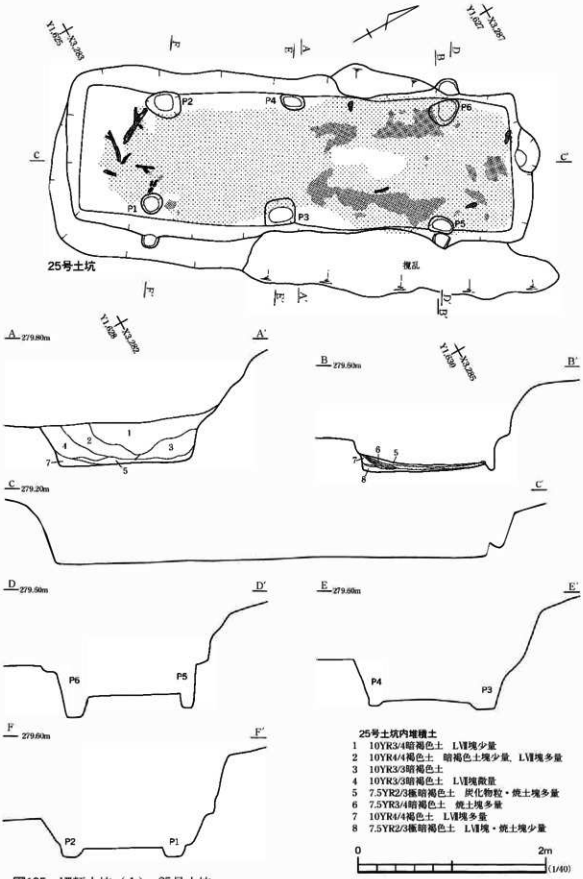


図135　Ⅷ類土坑（１）　25号土坑

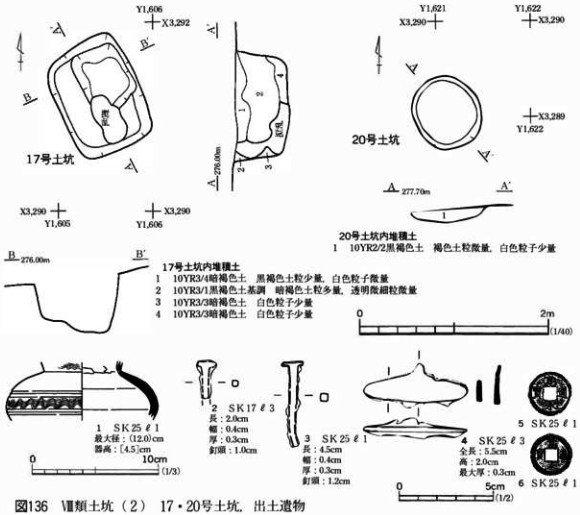


図136　Ⅷ類土坑（2）　17・20号土坑，出土遺物

SK17・20は堆積土に締まりがなく，近世以降と考えられるが，その性格については明らかにはし得なかった。

遺　　物（図136，写真109）

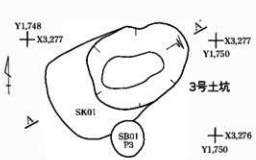
図136－1はSK25から出土した須恵器甕で，頸部から体部上半の破片である。肩部は丸味を帯びる。両部位に櫛描き波状文が見られる。体部の波状文は上下を沈線によって区画され，文様帯を形成する。本遺構の埋没途上に流れ込んだものであろう。それ以外は近世に属すると思われ，SK17から鉄釘（同図2），SK25から鉄釘・板状鉄製品・寛永通寶（同図3～6）が出土している。鉄釘はいずれも角釘で，板状鉄製品はその形状から火打金かと思われる。

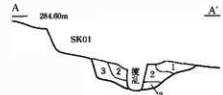
Ⅸ類土坑　（SK01・03・26・32・36・38・39・41・45）

遺　　構（図127・137，写真70・76・78・79）

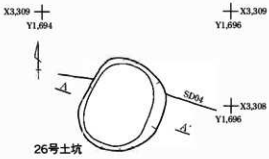
Ⅰ～Ⅷ類土坑に分類できなかったSK01・03・26・32・36・38・39・41・45を一括して本類とした。端的に言えば本類は，時期も性格も不明な遺構であるといえる。

形態を見ると，平面形が円形を基調とする擂鉢状の土坑（SK03・26・38・45）やピット状の小

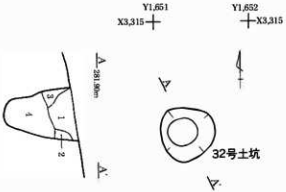




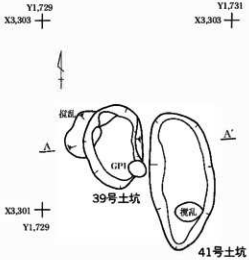
3号土坑内堆積土
1　10YR3/2黒褐色粘質土　褐色粘土塊多量
2　10YR3/3暗褐色粘質土　褐色粘土塊少量
3　10YR3/4暗褐色粘質土　黒褐色粘質土塊少量



26号土坑内堆積土
1　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　炭化物粒・焼土粒少量

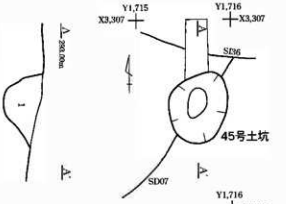


32号土坑内堆積土
1　10YR4/3にぶい黄褐色土　白色粒子・炭化物粒少量　LV基調
2　10YR3/3暗褐色土　LV塊少量
3　10YR3/2黒褐色土　LV塊少量
4　10YR2/3黒褐色土　LV基調，LV粒少量



39号土坑内堆積土
1　10YR2/2黒褐色土　炭化物粒・焼土塊微量，白色粒子少量
2　10YR3/1黒褐色土　褐色土塊少量

41号土坑内堆積土
1　10YR2/2黒褐色土　炭化物粒・焼土塊微量，白色粒子少量
2　10YR4/4褐色粘土
3　10YR2/3黒褐色土　褐色粘土塊・炭化物粒・白色粒子少量



45号土坑内堆積土
1　10YR3/2黒褐色粘質土

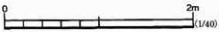


図137　Ⅸ類土坑（1）　3・26・32・39・41・45号土坑

型の土坑（ＳＫ32・36）など類似したものも存在するが，それらの間に分布的な特徴などは存在せず，関係性は全く分からない。

その他の，ＳＫ01については，調査区東部のＳＢ01内の南辺に接して存在する。ＳＫ03・ＳＢ01Ｐ３との間に重複関係があり，ＳＫ03→ＳＫ01→ＳＢ01という新旧関係が追える。土層断面図上には現れていないものの，ＳＫ03との重複部分には踏み締まり状の硬化面が存在する。前述したような位置関係とも併せて，ＳＢ01に付属する施設である可能性も考えられる。この点に関しては，すでにＳＢ01の項目で述べておいた。

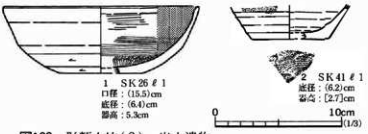


図138　Ⅸ類土坑（２）　出土遺物

また，ＳＫ39・41は調査区東部斜面の上下に隣接して掘り込まれている。付近にはＳＩ30をはじめとする住居跡群が存在する。形態は不整楕円形を呈し，いずれも30cm以上の深さに掘り込まれている。堆積状況はＳＫ39ℓ１・２とＳＫ41ℓ１は混入物の少ない土質であることから，斜面上方からの流れ込みと判断される。ＳＫ41の水平堆積を呈するℓ３の上面はℓ２とする褐色粘土が貼られ，しかも硬化している。これについては明らかに人為的に貼土したものと判断され，このことから，ＳＫ41はＳＫ39使用時の足場として機能していたと想定される。この２基の土坑は，住居跡群に隣接していることを考慮すると，これらの住居跡に付帯する作業場であるとすることも可能であろう。

遺　　物（図138，写真110）

土師器杯２点を図示した。いずれもロクロ整形である。図138－１はＳＫ26から出土したもので，体部下端から底部まで回転ヘラケズリが施される。器形は底部から丸みをもち，口縁部が外傾気味に立ち上がっている。９世紀中頃の所産であろう。同図２はＳＫ41から出土したもので，回転糸切り切り離し後の再調整は行われていない。９世紀末葉に位置づけられる。　（山　元）

第７節　溝　　跡

栗木内遺跡から検出された溝跡は８条を数える。時期や性格が推定される遺構は少ないが，ＳＤ01・02・04は近世以降の道跡とみられる。その他の多くも道跡の可能性が高い。

１号溝跡　ＳＤ01（図139，写真81）

本遺構は，調査区東部のＡ３－Ｈ６グリッドに位置する。西から東に下る斜面上に立地し，検出面はＬⅥである。すぐ南西側にはＳＩ03がある。重複してはいないが，ＳＩ03の床面が流出した位置にある。本遺構の深さなどを見るに，流出や削平を大きく受けた状況はみられないことから，ＳＩ03の東半分が失われた後に掘り込まれたもので，本遺構の方が新しいと考えられる。

堆積土は２層に分層した。ℓ１は自然堆積だが，ℓ２は礫混じりの粘質土で，踏み締まった土のようである。ℓ２上面が遺構の機能面かもしれない。本遺構は，残存部分の条の方向はN55°Ｗを指し，斜面の等高線に沿うように構築されている。全長が８ｍ，最大幅84㎝，検出面からの深さは最深で15㎝である。40㎝の比高を持って南東側に傾斜する。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構の性格は，斜面上の等高線にほぼ沿っていることや，流水の痕跡等がみられないことから，道跡と考える。溝の北西部は途切れているが，ＳＤ02に続く可能性が高い。出土遺物がないため，正確な時期は不明だが，ＳＩ03よりは新しいことから，平安時代以降の所産と考える。（遠　藤）

２号溝跡　ＳＤ02（図139，写真81）

本遺構は，調査区北東側のＡ３－Ｅ４・５グリッドに位置する。西から東に下る斜面の，やや谷状にくぼんだところに立地する。検出面はＬＶである。重複部分は検出できなかったが，すぐ西側のＳＩ38とは本来重複していたものと思われる。

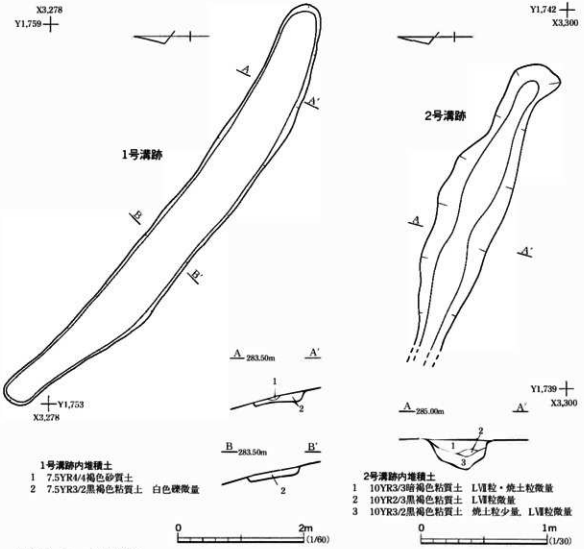


図139　１・２号溝跡

堆積土は，3層に分層した。すべて自然堆積土と考えるが，№1・3には焼土粒が混じっている。ＳＩ38など近隣の住居跡に伴う堆積土が混入した可能性が高い。断面形は，逆台形に近いが，底面には凹凸がある。本遺構は東端と西端が途切れている。残存部分の条の方向はN68°Wで，東端がやや南を向いている。規模は長さ2.5m，最大幅55cm，検出面からの深さは最深22cmである。底面の標高は284.70～284.98m，比高28cmであり，東側が低い。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構の性格は，流水の跡などが見られず，東端が南側を向いていることから，ＳＤ01につながる道跡である可能性が高い。調査区内の南側から北へ延び，西へ屈曲してやや谷状になっている斜面を上り，丘陵の鞍部へ向かう道であろう。遺構の年代は出土遺物がないため明確でないが，ＳＤ01との関係を勘案すれば，やはり平安時代以降の所産と考える。　（渡　蕃）

3号溝跡　ＳＤ03（図140，写真82・114）

本遺構は，調査区西部のＡ２－Ｆ４グリッドに位置する。地形的には西南部の小支谷中に位置している。周辺の遺構としては南方の斜面下位３mにＳＩ21がある。検出面はＬＶであり，南北に伸びるＬⅣに類似する暗褐色土の堆積範囲として確認されている。遺構の北部はＳＩ23と重複する。検出時にＳＩ23堆積土が本遺構に被っている状況はなかったことから，本遺構の方が新しいものと判断している。また，南部は攪乱によって破壊されている。遺構は南北に伸びているが，10°程西に傾く。北端は西向きに鉤手状に曲がっている。中央部の幅は狭いのに対して，端部は幅広に掘り込まれ，内部にさらに溝状の掘り込みを持つ。遺存長は６m程度で，幅は中央部で30cm，北端で80cmを測る。底面標高は中央部と端部の最深部が279.5m程度で，あまり高低差なく作られている。

遺物は土師器片９点と須恵器杯の杯身が１点出土している。図140－１は須恵器の杯身で，堆積土中位から出土している。堆積土が再堆積土であるＬⅣに類似していることから，本遺構に伴うものではないと思われる。受け部の稜は丸みを帯び，立ち上がりは直線的に内傾する。口端部は内削ぎとなっている。土師器は細片のため図示していない。

遺構の性格は，その形状から住居跡・建物跡に付属する雨落ち溝か区画溝と推測されるが，本遺構と軸線を同一にする遺構は確認されていないので，詳細は不明である。機能時期は重複するＳＩ23が古代と推定されることから，平安時代以降と考えられる。　（山　元）

4号溝跡　ＳＤ04（図141，写真81）

本遺構は，調査区中央部のＡ２－Ｄ８・Ｅ９・Ｅ10，Ａ３－Ｅ１・２グリッドにわたって位置する溝跡である。周辺は南北に延びる馬背状の尾根にあたり，本遺構はこの尾根頂部で検出された。ＳＫ26・34，ＳＤ05と重複し，いずれよりも新しい。遺構内堆積土は２層確認された。№1はＬＩ類似層で，締まりがない。№2上面は締まり強く，機能面の一つとみられる。人為的に埋め戻されている。同様の踏み締まりは，№2を除去した底面にも確認できる。

遺構は，西斜面から直線的に東西に走り，尾根頂部のＳＩ20・25付近で北方に湾曲している。こ